

アート × 食 × まち歩き

大分アートフェスティバル 2022

回遊劇場 AFTER

— 記録集 —



OITA ART FESTIVAL 2022

CONTENTS

目次

ごあいさつ	1	アートイベント	34
大分市アートを活かしたまちづくり推進会議 会長 戸口 勝司		◎シンポジウム アートと食をめぐる旅 回遊劇場と大分のアートシーン	
大分アートフェスティバル 2022「回遊劇場 AFTER」概要	2	◎アーティストトーク	35
ディレクターコメント	3-6	大分の記憶と記録 ネオ・ダダ 食とアートの原点	
「アートによるまちの再生 -回遊劇場 AFTERの試み-」 ディレクター 菅 章		◎マルシェイベント アートマーケット(アートプラザ連携事業) ふないZAC祭 全食力~ZAC新たな時代へ~ (田北調理師専門学校連携事業)	
空間キュレーターコメント	7	◎アートツアー	36
「現代アートの拠点創出をめざして」 空間キュレーター 松田 周作		ディレクターズツアー ポールさんとまち歩きツアー 大分路上観察学会ぶれぜんつトマソン探偵団「回遊劇場」編	
アートステーション	8	◎ワークショップ	37
【NTT府内ビル別館】		疋田 武士 沖 美紀 遠藤 ももこ Kana	
青トンカチ	9	◎パフォーマンス	38
穴井 佑樹	10	大分圏清掃整理促進運動会トイレ清掃パフォーマンス 出没☆イルミネーター	
岩澤 有徑	11	◎会場運営	39
岩田 敦之	12	パブリックアート	40
Oelectronica	13	トマリ アサミ 前田 信明	
甲斐 扶佐義	14	藤沢 さだみ snipe1	41
サバコ	15	アーティストプロフィール	42-44
前田 哲明	16	広報活動	45
前田 亮二	17	報道記録	46
宮川 園	18	MAP	47
森 貴也	19		
山本 豊子	20		
吉野 辰海	21		
ウォールアート	22		
公募作品【大ービルシャッター】 こっちゃん			
【キムラヤビル西側壁面】 塙 雅夫	23		
アートマルシェ	24		
[Modern Chinese Restaurant OPERA] 岩澤 有徑	25		
[イシカワ珈琲] 前田 哲明	26		
[TOMO Clover (トモクローバー)] 前田 亮二	27		
[ビストロ俊] 森 貴也	28		
[AN/ON BURGER(旧:SHIRO BURGER)] 山本 豊子	29		
[10 COFFEE BREWERS] Oelectronica	30		
[婆皿よしたけ] Oelectronica	31		
[月の木] サバコ	32		
[遊膳割烹 なか邑] サバコ	33		

ごあいさつ

大分市アートを活かしたまちづくり推進会議
会長 戸口 勝司

今から16年前の話です。ロシアと普通に交流ができていた頃、ボリショイ劇場のソリストやアーティストを客演招待して、大分県民芸術文化祭の開幕行事として、「ラ・バヤデール」というバレエを上演しました。公演が終わってから、彼女たちに大分という街の印象について尋ねてみたら、ほぼ異口同音に「とにかく街が清潔できれい。毎朝ホテルを出て散歩するのが楽しくて仕方がない。」と話していました。

大分市の「日本一きれいなまちづくり」構想も、「ラ・バヤデール」公演と相前後してスタートしたと記憶しています。その後、世界の情勢も日本の情勢も大きく変わりました。しかし、大分の街は変わらず清潔できれいです。このことは市民の皆さんの努力と大分市を訪れてくれた皆さんの協力なくしてはありえなかったことだと思います。心から敬意を表する次第です。

その清潔できれいな大分の街に、豊かな彩りを添え、非日常的な楽しい空間を現出し、アーティストックに食を味わい、個性あふれる人たちのトークやパフォーマンスを楽しんでいただきたいと考え、大分アートフェスティバル2022「回遊劇場 AFTER」を開催しました。10月28日から11月27日までの期間中、本当にたくさんの方に訪れていただき、また参加していただきました。

「Ars longa, vita brevis.」という格言があります。ラテン語で「芸術は長し、されど人生は短し」というような意味です。しかし、現代ではむしろ「Vita longa, ars brevis.」(人生は長し、されど芸術は短し)なのかもしれません。そうした時代であればこそ、記録することの意義は大きいと考えています。この小冊子は、大分アートフェスティバル2022「回遊劇場 AFTER」開催を記念して、この機会に、それぞれの場所で描かれたもの、創作されたもの、行われたことなどを記録して、永く皆様の記憶にとどめていただくために作成したものです。ご覧いただければ幸いです。



大分アートフェスティバル 2022「回遊劇場 AFTER」

会期：2022年10月28日(金)－11月27日(日)

会場：大分市中心市街地 各所

「回遊劇場 AFTER」は、2019年に開催した「回遊劇場 SPIRAL」の続編となるアートフェスティバルである。大分市は、これまで「おおいたトイレンナーレ 2015」や2度の「回遊劇場」などのアートフェスティバルの開催に加え、ウォールアートの設置などでアートを活かしたまちづくりをすすめてきた。「回遊劇場 AFTER」ではその成果を引き継ぎながら、コロナ禍で停滞したまちの賑わいを取り戻し、活力あふれるまちづくりを推進するとともに、新たなまちの魅力の発見を促すことを目指した。

企画概要

アートステーション

現在使用していないビル（NTT府内ビル別館）を拠点として活用し、作品展示やイベントのほかインフォメーションとして情報を発信

ウォールアート

招待アーティストや、公募で選ばれた県内アーティストによる壁画の制作

アートマルシェ

中心市街地の飲食店を会場として
「アート」×「食」×「空間」によるコラボ企画を実施

アートイベント

アーティストによるシンポジウム、トークイベント、ワークショップのほか、アートツアー、パフォーマンスなどを実施

パブリックアート

既存のパブリックアート紹介

アートによるまちの再生

— 回遊劇場 AFTERの試み —

「回遊劇場 AFTER」ディレクター・大分市美術館館長
菅 章

1. はじめに

大分アートフェスティバル「回遊劇場」は2018年、19年に続き3回目の開催である。

今回の「回遊劇場 AFTER」(以後 AFTER)はこれまでと異なる状況下での開催となった。過去2回は文化の祭典である「第33回国民文化祭・おおいた2018」「第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会」の大分市のリーディング事業やスポーツの祭典、「ラグビーワールドカップ2019™ 日本大会」の関連事業であり、文字通りお祭りムードの中でインバウンドを見込んだイベントであった。しかし、今回はビッグイベント関連でないということだけでなく、新型コロナウイルス感染症のパンデミック以来、グローバルな世界も一変したなかでの開催である。これまで当たり前のように移動し、集い、密接なコミュニケーションによって歓喜と祝祭の渦の中で盛り上がっていた人々が、3密を避け、移動を制限されるという日常を生きることになったのだ。

このような状況ゆえ、3年に一度の開催を延期するという選択肢もあった。しかし「大分市アートを活かしたまちづくり推進会議」は、まちが活気をなくし、経済活動が停滞する時にこそ、アフターコロナに向けた2022年の大分アートフェスティバルを開催して、アートの持つ創造性を活用し、産業の振興と地域の活性化を図ることが重要と判断した。

そのため、AFTERでは、ウィズコロナの中で、まちを回遊し、新たな価値観やまちの楽しみ方を体験してもらう仕組みをつくっていくことが重要だと考えた。人々の行動を促すためには、人々が何を望み、何が有効であるか。AFTER開催によって、これまでの文脈と異なる新たなまちの魅力を発見し、発信することによって、アフターコロナの出発点のひとつ

となることを目指していく。果たしてどのような回遊ができるのか。

2. テーマの設定とコンセプト、手法

今回掲げたテーマは「アート×食×まち歩き」。この組み合わせはコロナ禍で自粛の対象となった行為である。だが、ここには「見る、表現する、食べる、歩く、楽しむ」といった体験が含まれ、精神の自由や高揚感など人が生きる上で不可欠な要素が凝縮されている。コロナ禍のなか、公衆衛生上の安全性だけでなく、経済的にも精神的にも人は生きてゆけない。それゆえ人々とまちが元気になってもらうことをねらいとし、このテーマを設定した。「アート」だけでなく「食」だけでなく、両者をセットにすることで、魅力やモチベーションを高めることができると考えたのである。

「食」というアクチュアルな案件をアートと結びつけ、どのようにクリアするのか。また、コロナ禍ゆえその対策や手法への説明責任も必要である。困難な状況を中央突破するといっても、コロナ禍の状況で奮勇を振るおうとしているのではない。今回参加の店舗自体、入店制限や予約の他、通常の感染対策を講じてすでに営業を継続しており、それぞれ責任ある立場でリンクしている。また、拠点となるNTTアートシアターからSNS(YouTube、Facebook、Instagram、Twitter)発信をすることで、ネット上でも展開し、実体験とWeb上での体験、広報などを織り交ぜ、「アートと食とまち歩き」という新たなまちの楽しみ方を提案する。AFTERは拠点とサテライトという回遊性、リアルとヴァーチャルのメディアミックスによる複合性によって運営を組み立てたのである。

3. 回遊劇場 AFTER 4つの要素

(1) NTTアートシアターの魅力と可能性

今回拠点としたNTTアートシアターは、旧通信省大分郵便局電話分室（NTT府内ビル別館）として1927年に竣工した市内で最も古いRC建築である。アール・デコ調の意匠は味わい深く、規模的にもアートステーションとして申し分ない。2019年12月以降空きビルになっていたこのスペースを今回の空間キュレーターとして物件のリサーチ、交渉、現場の空間再生を担当した建築家の松田周作の熱意と行動力で、2階建て（一部中3階）のビル全館を活用し、展示空間、事務所、ワークショップ会場などとして使用することができた。また、大分大学の鈴木義弘教授率いる理工学部建築計画研究室の学生による同ビルや市内モダニズム建築の調査研究の成果をエントランス横の階段から2階廊下までパネル展示し、NTT府内ビル別館の歴史的意義や価値づけがなされたことは意義深かった。そして何より幸運だったのは、ビルの所有者、管理者であるNTT西日本大分支店の理解と協力が得られたことである。管理上の問題や得体の知れぬ(?)現代アートの展示に使用することは、かなり高いハードルだが、意図を理解し、ほぼフリーハンドで使用させていただいた。心から感謝申し上げたい。

さて、同ビルには部屋が30近くあり、事務所、倉庫、機械室、休憩室、トイレなど用途がさまざま条件も異なっている。壁や床の傷み具合もまちまちで、アーティストの部屋割りは難航が予想された。しかし意外にもパティンが少なく、トイレ、階段の吹き抜け、中庭などにも作品を設置することができた。1階の倉庫では空間の特性を自身の物語とリンクさせた山本豊子、部屋のキズや壁の汚れなども作品に取り込んだOelectronica、漆黒の空間にLEDと音響を展開した穴井佑樹、細長い部屋をコンピュータのクラウドに見立てて独自の世界へと誘ったサバコなどが高い天井とハイテックでレトロな空間を活かした展示をした。旧事務所の広い空間で、岩澤有徑のマルチスクリーンによる映像作品の上映が効果的であった。また階段吹き抜け部分に巨大でカラフルな吉野辰海の《SCREW 唐辛子犬》もインパクトがあった。2階では広い事務所スペースで、工房に見立て

たインスタレーションを設置した染色作家の前田亮二、写真と映像で凡庸な事務所空間を新たなギャラリー空間に再生し、大分の誘惑というテーマで魅せた甲斐扶佐義、LEDによるインタラクティブな作品を暗闇で展開した穴井佑樹、トイレ等で映像インスタレーションを設置した青トンカチなどメディア、手法の違いが際立っていた。森貴也は階段の1階から屋上までの吹き抜け部分をつなぐインスタレーションで新境地を見せ、中3階と中2階の小部屋では、前田哲明と吉野辰海が彫刻作品を展示。実績のある彫刻家の多様な表現が来場者を楽しませた。中庭では、前田哲明の鉄の彫刻《UNTITLED 07-A》と宮川園の蛍光による《光の庭》が物質と色彩、存在と現象という対照的な作品であった。両者の落差はアートの多様な在り方を浮き彫りにし、中庭を多元的な場へと変質させた。また、舞台正面上部のサバコのパネルも目を引いた。

(2) ウォールアートの新たな展開

ウォールアートへの最初の取り組みは2018年。2019年のラグビーワールドカップでは、アーティストに3点の壁画の制作委託、公募による4点のシャッター作品を制作した。2022年の回遊劇場 AFTERでは壁画とシャッターアートがさらに1点ずつ追加された。2020年から22年までの間に、パブリックアートの取り組みとして制作委託したウォールアートは4点に上る。ウォールアートはストックされるとパブリックアートとなる。現在大分市で見ることができるパブリックアートは地下道作品も含めて、15点である。これだけパブリックアートがある地方都市は珍しいと思われる。

今回制作した塙雅夫の《見護る牡丹》はAFTERの象徴的存在である。同作品はスケール、高精細度の描写、インパクトなど話題となる要素に満ちている。ロキシービルの屋上からの眺めはベストポジションで、会期中ビルオーナーの厚意で開放され多くのSNSの投稿で人口に膾炙した。また、シャッターアートについては、こっちゃんのかいしやの《にじいろの水族館》が公募にて採用された。

近年、前田信明、snipe1も全くタイプの異なった巨大壁画を制作したが、まちの生態系にあったウォールアートが出現することで人々の無意識や美意識に

少なからぬ影響が及んでくることを期待している。

(3) アートマルシェの挑戦

～アートと食と空間のコラボ～

「アート×食×まち歩き」をキャッチフレーズに、事業を展開するAFTERでは飲食店とのタイアップは必須条件であった。マルシェとはフランス語で「市場」を意味する言葉で、マーケットや屋台といったイメージに近い。今回レストランなどの飲食店をマルシェと位置づけ、そこでアーティストたちの作品が並ぶことによって、食とアートを結び付けることができなかつたか考えた。店舗選定の条件として①料理の分野のバランス②店舗の空間特性③まちなかでのエリアバランスと動線④アーティストとの相性などを考慮した。その結果、和食系創作料理2店、イタリアン1店、フレンチ1店、中国料理1店、ハンバーガー店1店、カフェ2店、鮨店1店となった。エリアでは、中央町4店、府内町4店、都町1店という配置である。

しかし、飲食店での展示・協力のハードルはかなり高い。それはオーナーシェフや料理長がアーティスト的存在だからである。店のコンセプトやインテリア、店内の調度品等は料理の演出同様考え抜かれたものである。また、厳しいコロナ禍での営業ゆえ、ぎりぎりの経営で時間的、人的余裕がないなどの理由も考えられる。そこで企画の意図やアーティストとのコラボレーションの意義を丁寧に説明した。かなり難航したが、アーティストと店舗候補の選定を同時に進めながら、協力店は7月頃に決まった。その後の店舗とアーティストの相性やマッチングはかなり苦慮したが、最後はミッシングピースが完成するようにはま嵌っていった。

(4) アートイベントによる賑わい

NTTアートシアターの魅力は、建物の2階廊下のどこからも望むことができるコの字型の中庭である。オープンエアのため天候を心配したが、幸い会期中雨天も少なく、ほとんどのイベントが実施できた。今回、この中庭に設置したステージでオープニングイベント、シンポジウム、アーティストトーク、音楽ライブ、ダンスパフォーマンスなど数々のイベントを開催した。また、テントを準備して会期中毎日、飲食

や農産物等の販売も行い、賑わい創出の仕掛けをした。マルシェイベントとして、10月30日のアートプラザとの連携による「アートマーケット」、11月3日の田北調理師専門学校との連携による「ふないZAC祭」などを開催し、まちの賑わいを呼び込む試みを行った。

終盤のハイライトとなったのが岩田敦之のプロジェクトマッピングである。夜のとぼりが下りた18時から約2時間、NTTアートシアターはカラフルな水族館と化した。ここでもコの字型のジャストサイズの中庭が親密で幻想的なムードを引き出した。映像に併せてシャボン玉が効果的に夜空に舞い上がっていくファンタジックな光景は人々の心に刻まれたことであろう。また、このマッピングとコラボレーションしたジャズプレーヤー枝次竜明(tp)と村田千尋(p)のサウンドは映像と音楽のコラボとして新たな展開の可能性を感じる実験的な試みであった。シンポジウムとアーティストトークは県内、県外、年齢構成などを考慮して、県外と県内を中心としたそれぞれのシンポジウム、県外のベテラン作家とのアーティストトークといった構成を組んだ。トピックも食、土地、時代、アートシーンなど多岐にわたった。そのほか、NTT西日本大分支部三笠支店長との対談や大分圏清掃整理促進運動会のトークセッションも行った。ワークショップは大分市が進めるアートレジオン推進事業において佐賀関と野津原の旧校舎アトリエで活動しているアーティストに依頼。アート体験を楽しんでもらった。アートツアーでは、ディレクターズツアー3回、ボランティアガイド「ポールさん」(以後ポールさん)とのまち歩きツアー2回、大分路上観察学会のトマソン探偵団の他、勝手連的ツアーなどさまざまなツアーが組まれた。青トンカチの《残影と種》プロジェクトによる猫又のサインが目印となって、QRコードとGoogle MAPとのリンクでアートマルシェ、ウォールアート、パブリックアートを回遊することができた。パフォーマンスは大分圏清掃整理促進運動会によるトイレ清掃パフォーマンス、宮川園の「食べるポエム」、ゲストパフォーマー日下淳一による「出没☆イルミネーター」などがあった。宮川のパフォーマンスは今回のフェスティバルの象徴的イベント。実際参加者の多さは、期待の大きさを物語っており、中庭の雰囲気ミステリアスな異次元への食とアートの演出であった。イルミネーターは日没後のまちなかを回遊し

た後、NTTアートシアターのプロジェクトマップ
ピング会場に現れ、圧倒的な存在感で、SNSにも
露出した。

最終日、中庭での骨董市「すずなり蚤の市 at 回
遊劇場 AFTER」は、ほのぼのとした雰囲気の中で、
フィナーレにふさわしい賑わいを生み出していた。
京都から駆け付けたデカルコマリイの飛び入りのパ
フォーマンスも異彩を放っていた。

4. 成果と課題

これまであまり知られていなかったNTT府内ビ
ル別館というまちなかの歴史的な建造物を舞台に
アーティストがサイトスペシフィックな展示を展開す
ることができた。また、展示だけでなく、ビルの歴史的
建築的な調査、さまざまなイベントの開催による
ジャンルの交流、県内外を問わずアーティスト同士の
交流やポールさんとの親交なども活発であった。展
示、調査研究、教育普及などを通して、アートを活
かしたまちづくりが目指す、「地域の魅力づくり」「地
域を誇る気持ちの醸成」「創造的人材の育成」などに
微力ながら貢献できたと思っている。また「地域経
済の活性化」に関しては、アートマルシェでの店舗
とアーティストのコラボレーションによる相乗効果や
アートステーション（NTTアートシアター）での飲食
店、産直販売といった賑わいの場の創出が多少なり
とも実現できたと感じた。

一方課題として挙げられるのは、広報活動である。
計画の全体的な遅れや未決定な部分が多く、早め
の広報活動ができなかったことやプロモーションを
計画的に展開するまでに至らなかった組織的問題点
など反省すべき点が多い。また、アートマルシェでの
料理（料理人）、アート（アーティスト）、インテリア（建
築家）に踏み込んだ本格的なコラボができなかつ
た点などがあげられる。当初若手建築家との連携に
よる可動建築（屋台）なども模索したが、調整不足、
時間不足で断念した。

また、食をテーマに掲げながら、食のイベントが
少なかったことなども反省点である。ここは食のコー
ディネーター、キュレーターを登用し、アートとどの
ように絡めるかを研究する必要があった。これらの
反省点を今後の活動に活かしていきたい。

5. おわりに

1カ月間の開催であったが、天候にも恵まれ、ほ
とんどの行事を無事に終了することができた。コロ
ナ禍の状況での食とのコラボレーションは、初めて
の試みゆえ、誰に相談すべきかが全く見当が付か
ず、店舗に飛び込みで依頼するのも唐突過ぎてかな
り勇気がいった。それでも協力が得られ、さまざま
な企画を実現することができたのは、人々のまちの
活性化への思い、アートの創造性、可能性への期待
などがあったからこそだと考える。さらには市民もこ
うしたイベントの楽しみ方を知り、気軽に参加して
くれたことなど、回遊劇場がまちなかのアートフェスティ
バルとして認知され定着した結果であるにとらえてい
る。そして何よりも今回、多くの人にとって未知の拠
点NTTアートシアターでサイトスペシフィックな展
示が実現し、中庭でのさまざまなイベントが開催で
きたことで、拠点とサテライトをつなぐ回遊性やまち
を劇場として楽しんでもらう機会となったことをうれし
く感じている。

もちろんそこには、これまで開催したアートフェ
スティバルの人的遺産^{レガシー}ともいえる、アーティスト、事務
局スタッフ、ポールさん、各商店街の関係者、企業、
ミュージシャン、大学、専門学校などの協力や連携
が大きな力となったことはいうまでもない。皆様に感
謝申し上げるとともに、AFTERの試みがアートによ
るまちの再生に向けた一里塚として、今後につな
がるための整理・検討を進めていきたい。

現代アートの拠点創出をめざして

「回遊劇場 AFTER」空間キュレーター・建築家

松田 周作

はじめに、「回遊劇場 AFTER」の空間キュレーターとしてプロジェクトに参加させて頂きましたこと、また、事務局をはじめ、多くの関係者の方々の多大なるお力添えを頂きましたこと、心から感謝を申し上げます。

まず、ディレクターの大分市美術館・菅章館長、ディレクターにより招聘された大分県内外の尊敬するアーティストの皆さん、建築と作品を通じた感動的な出会いが生まれました。また、インストーラーの大久保剛さんとアーティストのKanaさんお二方のご尽力により、作品たちの展示が成立する空間として仕上げられました。そして何より、旧通信省大分郵便局電話分室(以後 NTT 府内ビル別館)をメイン会場である NTT アートシアターとして提供するご英断を頂きました NTT 西日本大分支店の関係者の皆さま方に心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

NTT 府内ビル別館は、大分市役所本庁舎の正面・国道 210 号線を挟んで向かい、大分合同新聞社本社ビルや大分銀行本店、トキハ本店、府内五番街などのほぼ中央に位置します。1927 年(昭和 2 年)竣工で、大分市中心部で戦災を逃れた最古の RC 造の建築物です。同時期の建物には東京の同潤会青山アパートメント(同年竣工)、横浜の BankART 1929(1929 年竣工)、2022 年に妹島和世さんが館長に就任した東京都庭園美術館(1933 年竣工)等があります。アール・デコ様式の当時の建築の気分をファサードに反映された建物で、大分大学鈴木義弘教授は、モダニズム建築の先駆けとしての価値を見出しておられます。そして 2022 年「回遊劇場 AFTER」のメイン会場として奇跡的に「開かれた建築」としての役割を得たのです。

世界的な現代建築の巨匠・磯崎新氏の生誕の地である大分市中心市街地は、まさに「建築」の聖地です。大分県庁舎、旧大分県立図書館(現アートプラザ)、日本建築学会賞受賞の建築作品が 2 つも存在します。アートプラザが現代建築の聖地ならば、

NTT アートシアターを現代美術の聖地としたいと考え、全フロアをギャラリーとする 1/50 の敷地を含む建築模型を制作しました。大分市役所からも見下ろせる中庭空間に大いに魅力を感じ、人々が憩い集う明るい開かれた広場となることを願いました。菅ディレクターと出会った学生時代、「藤森照信」研究の延長として竹田市長湯のラムネ温泉で「縄文建築団」の焼杉や銅板葺きワークショップに参加した経験があったため、今回、藤森照信氏へのオマージュ「縄文建築団 塗装編」として中庭を真っ白にするワークショップを開催しました。磯崎新氏の処女作・新宿のホワイトハウスの吹抜空間がネオ・ダダの誕生の地、アートプラザの 60's ホールはネオ・ダダの聖地であるならば、NTT アートシアターはネオ・ダダの 3 つ目の縁の地としたい、そしてその手法はネオ・ダダのメンバーでもある赤瀬川原平氏が名付け親である藤森照信氏の素人による建築施工「縄文建築団」により実現させるという想いで空間づくりに取り組みました。

「回遊劇場 AFTER」を通して、NTT アートシアターが誕生したこと、つまり、私たちが思い描く夢がテンポラリーにせよアートギャラリーとして実現した奇跡は、私個人の生涯の記憶と同時に、大分という「街の記憶」としてもエポックメイキングな出来事となりました。約 100 年もの間、大分という地の時代や街並みの変化に耐えて順応しながら人知れずその姿を止めてきた建物の大分の街に生きる建築としての物語が始まりました。



NTT 府内ビル別館 1/50 建築模型
制作：松田周作建築設計事務所



Art Station

アートステーション

今回メイン会場としたのは、NTT府内ビル別館。

普段足を踏み入れることのない場所で、13組のアーティストが作品を展開し、お客様に未知との遭遇を体験していただいた。

また、会期中は「NTTアートシアター」という名称で、作品展示やイベントのほか、インフォメーションとして情報発信の役割を担った。



制作：大分大学理工学部建築計画研究室

NTT 府内ビル別館

青トンカチ (インスタレーション作家)

穴井 佑樹 (メディアアーティスト)

岩澤 有徑 (現代美術家)

岩田 敦之 (デザイナー)

Olectronica (美術ユニット)

甲斐 扶佐義 (写真家)

サバコ (彫刻家)

前田 哲明 (彫刻家)

前田 亮二 (染色作家)

宮川 園 (たべもの建築家)

森 貴也 (彫刻家)

山本 豊子 (美術家)

吉野 辰海 (造形作家)

NTT 府内ビル別館

NTT大分支店の拠点ビルのひとつとして稼働していたが、2019年12月、拠点見直しにより空ビルとなった。もともとは、1927年に大分郵便局の電話分室として竣工したもので、大分市街地では数少ない現存する昭和初期のRC建築である。この建物の持つ建築的な価値と空間の面白さがアーティストの感性を刺激し、展示会場としても魅力的であることから、今回特別に会場として使用させていただいた。

【凡例】

このカタログは作家名、作品名、素材、サイズ(立体:高さ×幅×奥行、平面:縦×横)、制作年、設置場所の順に記載している。作家作品解説は、「回遊劇場 AFTER」ディレクターの菅が担当した。



《隣の幽体》



《残影と種》



《残影と種》

今回、青トンカチには2つのオーダーを出した。一つはNTTアートシアターのトイレを使用したインスタレーション。もう一つはまちなかで展開するアート作品を何らかの仕掛けで有機的につなげるというミッションである。

前者では洋式トイレ隣の和式トイレからオーロラフィルム越しにLEDフラッシュライトなどの「幽体」に投影された便座に座った自らの影が「シャボン玉」の膜の様に揺れ動く《隣の幽体》。熱・音・光・匂いなど五感を刺激する装置によって個の世界を包む脆弱な膜で自他の境界を暗示する。

後者の《残影と種》は、まちなかとNTTアートシアターをつなぐプロジェクト。まちなかでの青い猫又のシールのマーキング、Google Mapのサイト上でのマーキングという異なるメディアによって構成される。行為としては「残影」の追体験、「まち」の回遊、「種」(過去と未来を繋ぐ伝達媒体)の伝達、これらを一連の体験プロセスとして試行したものである。両作品の共通のテーマである「呼应」をアートシアター内の映像作品で表現した。

青トンカチ

Aotonkachi

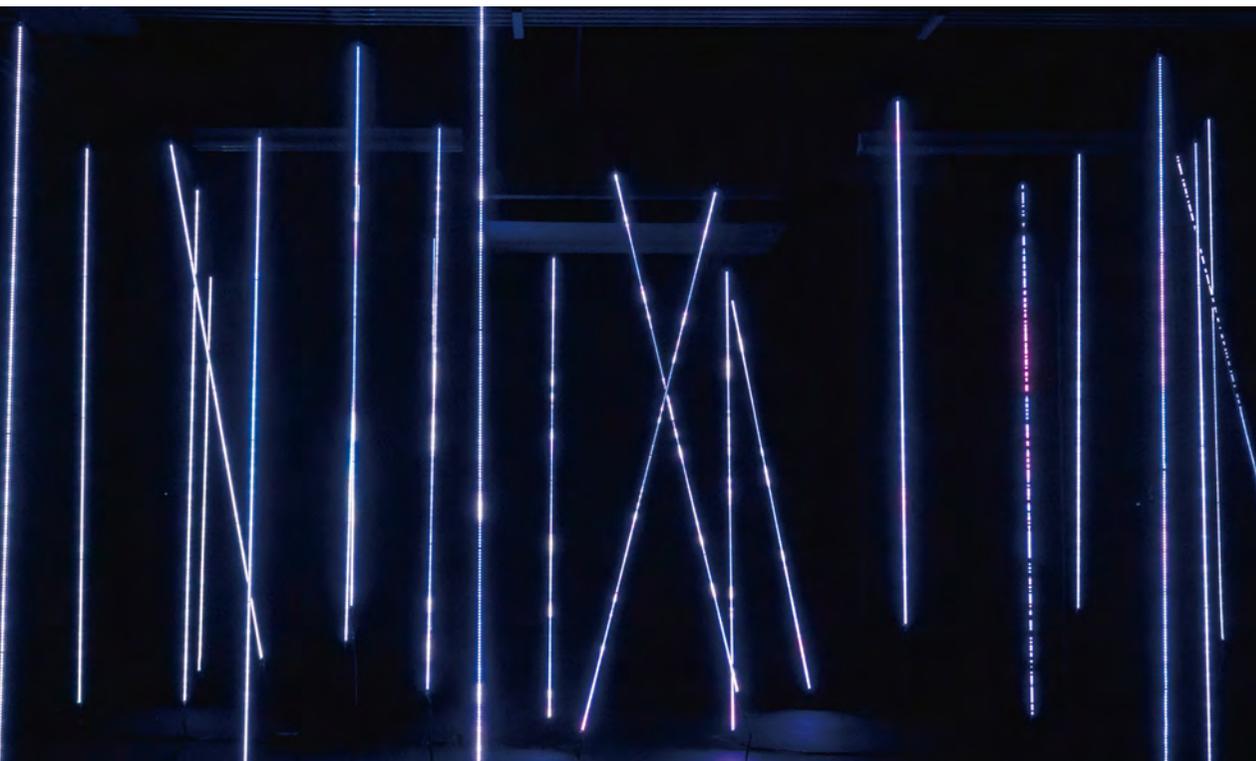
隣の幽体

オーロラフィルム、LEDフラッシュライト
190 × 138 × 115cm
2022年

残影と種

ラバーペイント、サインシール
21 × 29.7cm
14.8 × 21cm
2022年

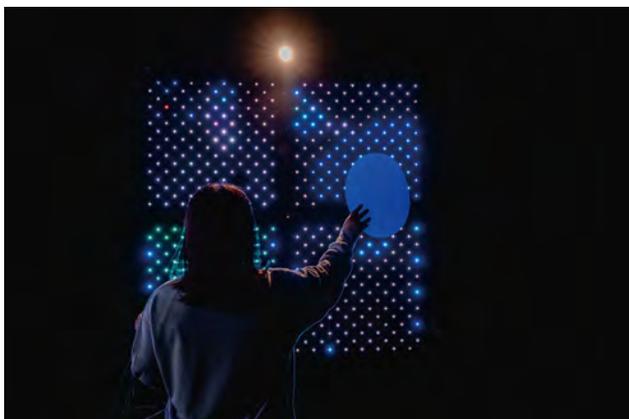
[NTT府内ビル別館 府内町3-4-34]



《enérgeia》



《enérgeia》



《Re-filter》

穴井 佑樹

ANAI Yuki

enérgeia

LED、スピーカー
2022年

Re-filter

LED、Webカメラ、スピーカー
180 × 180cm × 2unit
2021年

[NTT 府内ビル別館 府内町 3-4-34]

穴井佑樹は1階と2階の二部屋でLED、Webカメラ、スピーカーなどによる作品《enérgeia》と《Re-filter》を設置。1階の《enérgeia》はギリシャ語でエネルギーを意味する。天井、床に上下にプログラミングされた青、水色、黄、緑、赤、紫、白などの光が移動し、まるで生命体のようにさまざまなパターンで変化する約7分の作品。スピーカーから流れる音響と光のシャワーが暗闇の中で異次元空間のドラマを展開する。我々は絶え間ないエネルギーを一身に感じ、見つめることで、この形のない存在について、境界について問うのだ。

一方2階の《Re-filter》はインタラクティブな作品。4分割された正方形に埋め込まれた無数のLED(中央にWebカメラ)の前に立つと人の動きに反応し、LEDライトが点滅する。しかも色彩に反応するので、カラープレートで色の変化を楽しむことができる。古いフィルターを剥がし、異なる角度から眺める想像力を持つことで、多彩な真実があると気づき、新たな世界を発見していくことになる。

岩澤有徑は絵画、映像、LEDなど異なったメディアによる作品を発表するアーティスト。NTT アートシアターでは、元事務所スペースであった広い部屋を遮光し、3台のプロジェクターを駆使したマルチスクリーンによる映像作品を出品。ドガ、デュシャン、ピュッフェという3人のアーティストが見た（可能性がある）であろう光景から推量したモチーフや自己に置き換えたモチーフによってストーリーを紡ぎ出す。

ドガの「踊り子」に対して祇園の舞子、デュシャンの《自転車の車輪》は、1900年にパリ万国博覧会のために建設された観覧車を見た可能性として、ピュッフェの黒く力強い線描を子どもの頃近所にオープンした水族館で見たウニや水母くらげに触発されたという仮説である。これら妄想にも似た仮説は美術史のブラックボックスであり、アーティストへのアプローチとしても興味深い。そして岩澤の動画映像のコマ割り、タイムラグの巧みさや美しさも見落としてはならない。

岩澤 有徑

IWASAWA Arimichi

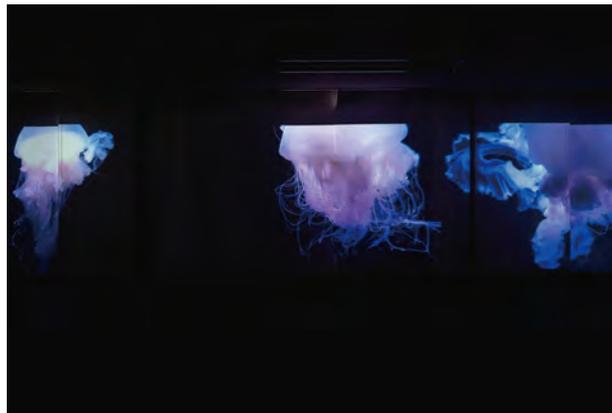
INDIVIDUALS MOVE 2022

DVD × 3 17min. loop

180 × 720cm

2022年

[NTT府内ビル別館 府内町3-4-34]





岩田 敦之

IWATA Atsuyuki

BUBBLES! 夜のカラフル水族館 (共同制作：紀野はるか 他)

プロジェクションマッピング
650 × 4620cm、300 × 900cm (2面)
2022年

[NTT 府内ビル別館 府内町 3-4-34]

岩田敦之が自らのゼミで指導する学生とともに取り組んだプロジェクションマッピング《BUBBLES! 夜のカラフル水族館》は、NTTアートシアターのフィナーレを飾るイベントとして人々の記憶のスクリーンに刻み込まれたに違いない。コの字型の建物がプロジェクションされた建物を中庭から眺めると、夜のとばりに浮かぶ水族館に変容する。水の中をのびのびと自由に泳ぐ生き物たち。色彩豊かな絵本の中に入り込んだような幻想的な世界が広がる。6台のプロジェクターを連動させた映像と音楽、きらめくシャボン玉によるカラフルな水族館は晩秋の夜を彩る夢の世界へと人々を誘った。

岩田敦之は、プロジェクションマッピングやデジタルサイネージが効果的なビジュアルコミュニケーションのツールと考えている。地域社会との連携を積極的に進める岩田にとって、今回の開放的な屋外でのアートフェスティバルでのイベントは、人々に感動と一体感をもたらす新たな試みとなったに違いない。

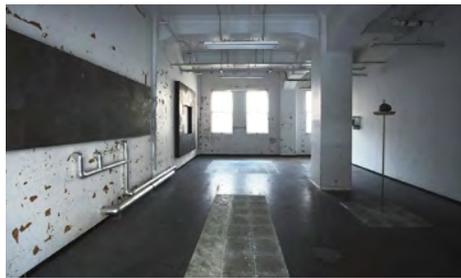
美術ユニット Olectronica (以後オレク)は極小から極大の世界へとスケールを変えながら、我々の視線や視角、環境の次元を変換するプロジェクトを実践してきた。そこには時間という要素も含まれ、時空を変換する多視点、多時間を旨とする。今回のNTTアートシアターの展示空間は、そんなオレクを刺激するに十分な素材であった。壁に遺る剥がされた古紙の断片、壁や天井を這うパイプ、正方形の塩ビタイルが一面に敷き詰められている床。そこに彼らは「痕跡」を見た。それは人々の営為であり、過ぎた時間というファクターである。床の黒い傷だらけの塩ビタイルは一部が剥がれていた。彼らは剥がれた床と貼られているタイルの違いに着目し、タイルを剥がすという行為を選択。最小限の表現によって、床と壁にトポロジー空間ともいえる、ネガ・ポジを床と壁に展開させた。併せて、オレクの十八番の極小人形が舞台セットよろしく登場することで、部屋のスケール感はさらに多元化した。

Olectronica

Sculptures on the floor

床材・木材・塗料・ビューター・ステンレス・石・ガラス
360 × 545 × 867cm (部屋のサイズ)
2022年

[NTT府内ビル別館 府内町3-4-34]



撮影 / Kentaro Nakamura



甲斐 扶佐義

KAI Fusayoshi

大分の誘惑

大判：ターボリン、UV インクジェット印刷

額装：セミグロスポスター紙、
UV インクジェット印刷

大判：150 × 150cm (2点)、
150 × 300cm

額装：42.0 × 54.2cm (6点)、
54.2 × 42.0cm (10点)

2022年

[NTT 府内ビル別館 府内町 3-4-34]

大分市に生まれた甲斐扶佐義は4歳で山香に転居。山香では父親から鶏の世話を任せられ、鶏を襲う動物を空気銃で撃っていた。そんな弟の行動を心配した姉が11歳の時カメラを与えたのが写真の始めたきっかけだという。その後カメラは甲斐の身体の一部となった。同志社大学に入学以来、京都に住み続けている甲斐は、観光客が目にする事のない京都の日常や美女、猫などさまざまなモチーフを撮り続けてきた。彼の写真のファンは多く、海外での評価も高い。今回、NTTアートシアターで甲斐が選んだ部屋は、2階の旧事務室。パーティションで3つに区切られたそれぞれのブースに大判のターボリンにUVインクジェット印刷した写真、小判の額装作品の展示、映像番組「ほんやら洞の甲斐さん」の紹介をした。「大分の誘惑」と題された展観は1978年と93年に大分で撮影した写真から選んでもらったもので、野津原、別府、大分市街地など、懐かしさと未知の大分が混在した不思議な世界が展開された。

サバコが選んだ部屋は1階の細長い部屋。その部屋をコンピュータのクラウド (cloud) の内部に見立てた部屋の空間全体が作品の容器になっている。部屋に入る (ログインする) と壁にはログインの痕跡であるIPアドレス (識別番号) が夥しく並ぶ。天井には綿で作られた雲が浮遊している。この雲の存在がすなわちクラウドである。雲には人の思考が浮遊しており、雲 = cloud が室内に佇む3体の人型のオブジェとつながり、膨大なデータが送られてきたり流れ出て雲の中に消えていったりする様子がかがえる。目に見えないコンピュータのシステムを擬人化し、可視化することで、サバコは不可思議な世界を共に楽しもうとしている。そのことは同時に、情報に支配される現代社会を批評することでもある。

さらにサバコワールドはタイル張りの小部屋で、宇宙人か古代文明の遺跡を思わせる《Portic Altar》を展示。Altarとは祭壇の意味で宇宙人ポルチコピリンを祭っている。下部には経典のような謎の文書、記号が記されている。

サバコ

Savako

オーバーヘッド・ストーリー“ログイン”

綿、布、鉄

360 × 230 × 867cm (部屋のサイズ)

2022年

Portic Altar

真鍮、布、鉄、紙、木材

祭壇：70 × 42 × 12cm

高台：150 × 42 × 40cm

2009年

[NTT 府内ビル別館 府内町 3-4-34]



《オーバーヘッド・ストーリー“ログイン”》



《オーバーヘッド・ストーリー“ログイン”》



《Portic Altar》



《オーバーヘッド・ストーリー“ログイン”》



《UNTITLED 2022》

前田 哲明

MAEDA Noriaki

UNTITLED 2022

鉄
245 × 230 × 230 cm
2022年

UNTITLED 07-A

鉄、木材
235 × 183 × 205 cm
2007年

[NTT 府内ビル別館 府内町 3-4-34]



《UNTITLED 07-A》



《UNTITLED 07-A》(部分)

前田哲明は今回2点の鉄の彫刻を出品した。1点は中庭に設置された《UNTITLED 07-A》。1997年文化庁在外研修制度によるイギリス留学を終え、帰国(2001年)後にその成果を発表した展覧会に出品したもの。鉄の彫刻家として高い評価を確立した頃の作品である。留学中の前田は英国王立芸術院でフィリップ・キングの指導を受け、それまでのヴォリュームのある鉄の彫刻から、軽さを取り入れた表現を模索していった。「ヴォリュームに掻き消され伝わらなかった言葉を、一つずつ再現するような行為の繰り返しであったのかもしれない」と前田は語る。《UNTITLED 2022》は室内の展示。中3階の小部屋いっぱいに設置された新作で、錆びた鉄板とパイプを組み合わせ現地で溶接した。ここではヴォリュームはさらに縮減され、不定形の鉄板が組み合わせられながら空間を形成する。我々は、部屋の空間と拮抗した前田の彫刻の中に含まれながら展示空間と彫刻の内部を移動し、物質-構造-空間を体験するのだ。

前田亮二は、染められた薄い生地（シルクオーガンジー）を重ねることによって、淡い色彩が重なり合い、深く優しい色彩に変化させ立体感のある作品を生み出してきた。幾何学模様を組み合わせ重ねることで、立体的なロボットが浮かび上がる《前田ロボ》などが代表的である。今回、そのシリーズを発展させ、NTT府内ビル別館 2階の一番奥の部屋に《前田ロボ工房》を設置。天井から吊り下げられたフレームには、二重になった生地のレイヤーの距離があるため視点の移動で、ロボットの眼が動き出すという、オプティカルな体験が楽しめる。また、秘密基地のような大型装置のロボットや小さな木製のロボットが、染色の過程を示したり、作りかけの道具がさりげなく置かれたりして、夜になると動き出すのではないかという想像を掻き立てられる。部屋全体が、まるでおもちゃ箱の世界を覗くような楽しい空間である。

前田 亮二

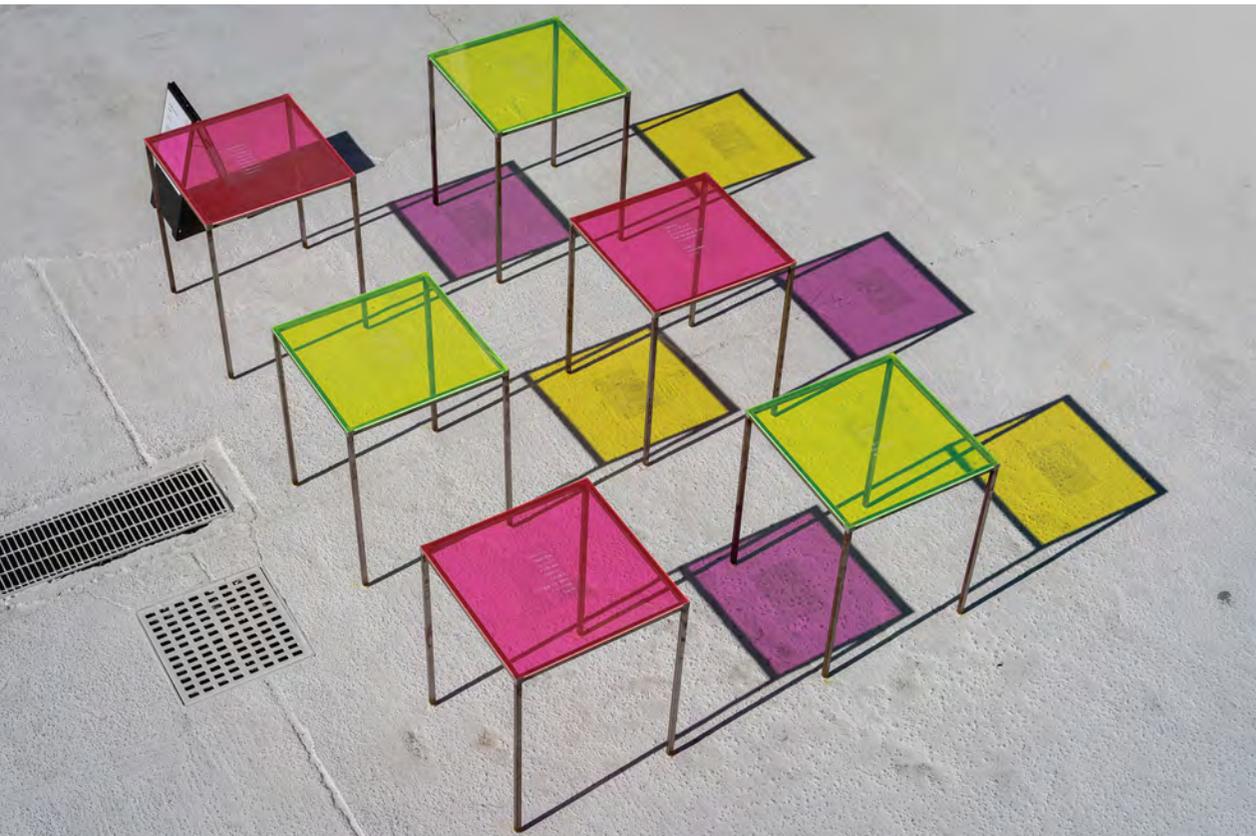
MAEDA Ryoji

前田ロボ工房

シルクオーガンジー、綿布、染料、木、ステンレス
 250 × 250 × 250cm
 150 × 95 × 7cm (5点)
 115 × 90 × 6cm
 その他多数
 2022年

[NTT府内ビル別館 府内町 3-4-34]





《光の庭》



《光の庭》(部分)



パフォーマンス「食べるボエム」

宮川 園

MIYAKAWA Sono

光の庭

スチール、アクリル板
90 × 70 × 70cm (6点)
(制作協力：株式会社王子全機)
2022年

[NTT 府内ビル別館 府内町 3-4-34]

宮川園は中庭を舞台に選んだ。《光の庭》と題された作品は、赤と黄色のテーブルをそれぞれ3基設置したもの。テーブルはこの中庭のための祭壇であり、記憶の風景への入口だという。蛍光アクリル板で覆われた天板はエッジがまるで色付きLEDライトが内蔵されているかのような光を発する。テーブルは昼間直射を受けると、アクリル板が白い床に透過し、矩形の赤と黄色を宿す。その鮮やかさは「光の庭」そのものだ。日常的にテーブルとして使用され、天板に彼女の詩が挿入され、読みながら食事をすることもできる。

会期中2度開催されたパフォーマンス「食べるボエム」では、宮川が吟味して選んだ食材がテーブルに配置される。それは不思議な色彩、形状、質感をもった素材で、宮川は、まるで絵を描くように混ぜ、新たな創造物たる食事を完成させる。その間に彼女の詩の朗読があり、参加者はひと匙から想像する風景を味わいながら「食べるボエム」を体感した。

森貴也はNTTアートシアターの東側南にある1階から屋上まで繋がる階段の吹き抜け部分に《3次元の絵画 ～重力と張力～》と題された反ミメーシス（反再現的）作品を設置した。95年前の建築の階段吹き抜けはエレガントで、わずかにアールがある木製の手すりや下から見上げるとライトブルーに彩色された階段の裏面など魅力的だ。森はカミュの『シュールシボスの神話』さながら、表面積（約1.4m×70m）を絵画用のキャンバス地で切り出し、繋ぎ合わせ、それらを階段のアウトラインの全長のロープ（約270.15m）を使って、吹き抜け部分に吊るしたり引っ掛けたりしながら空間を構成していくという作業（苦行）を繰り返した。建築空間の一部を絵画に見立て、窓から差し込む光や、階段を昇り降りしながら鑑賞する人の影によって、作品の表情は刻一刻と変化する様子を捉えようとした。その行為は歴史を重ねた建築空間を芸術的行為で批評する、時空を超えた再創造に思えた。

森 貴也

MORI Takaya

3次元の絵画～重力と張力～

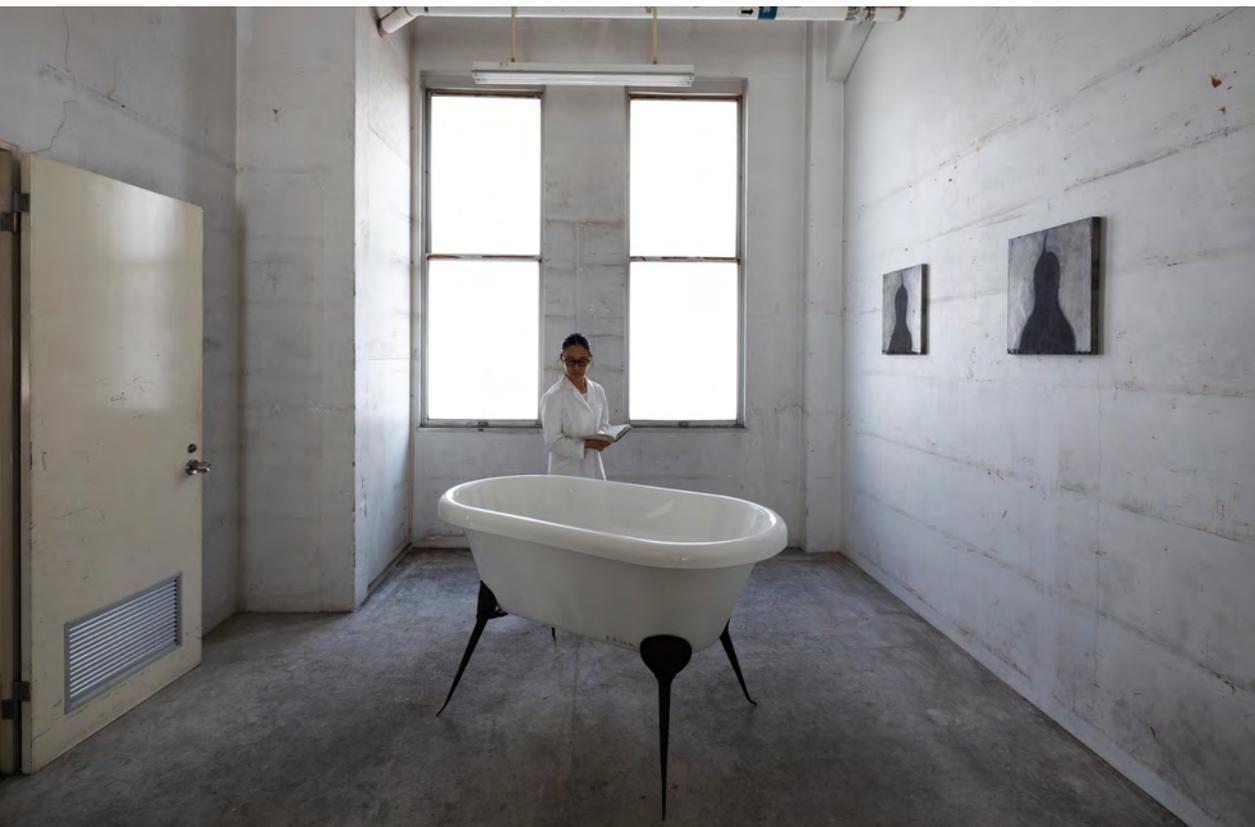
キャンバス・ハトメ・ロープ

1100×300×300cm

2022年

[NTT府内ビル別館 府内町 3-4-34]





撮影 / 未正真礼生

山本 豊子

YAMAMOTO Toyoko

宇宙時代の独身主義、さえも

アクリル、鉄、オリブオイル
80.0 × 150.0 × 78.0cm
2008年

紙、インク/ミクストメディア
49.5 × 44.9 × 2.5cm
2008年

ビデオ
6分18秒

2004年 制作：ユノカ・ラボ

[NTT府内ビル別館 府内町3-4-34]

山本豊子は架空の物語を元に立体、ビデオ、版画、ドローイングなどにより表現したインスタレーション作品を出品。展示場所は1階の高い天井とコンクリートの床を持つ倉庫とポンプ室を選んだ。縦長で大型の窓が二つあるこの部屋を「独身者」の悦楽的空間として、その収集物にて構成しているという。《宇宙時代の独身主義、さえも》というマルセル・デュシャンを彷彿とさせるタイトルである。部屋に入ると、右側に尖った金属の器具のようなものが壁に5つ取り付けられている。その不思議な形状は部屋の奥に置かれたバスタブの脚である。宇宙船を暗示するバスタブの中にはE.V.オリブオイルが注がれている。このオイルは宇宙人の体の油を搾ったものだという。小瓶の青い液体は植物のエッセンシャルオイルで宇宙から見た地球の青から連想される。隣のポンプ室では、どれが、どこまでが作品なのかわからないほど、環境と一体になったオブジェが潜んでいる。

ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズの数少ない生き残りメンバーである。80年代から犬の表装を持つ作品を数多く作り続ける。今回は、その中でも初期の作品《鼻ねじれ》と後期の代表作《SCREW 唐辛子犬》を出品。地球の自転運動に代表されるように事物には中心があり回転するというのが吉野の彫刻力学であり、スクリュー犬など、回転運動をするねじれた犬がテーマとなる。《鼻ねじれ》は突起状の口や鼻が回転してねじれ、バケツの上に座った犬は哀愁に満ちている。日本という国の美術の位置がバケツの上の犬の表情に証徴されていると、吉野は語る。一方《SCREW 唐辛子犬》は2011年の東日本大震災の年の制作である。不吉を象徴するクローム・イエローの油性塗料で塗られた犬頭である。なぜか赤唐辛子を頭上の中央に突き刺されている。この赤唐辛子も回転運動を見ることができるのかもしれない。力を与える、あるいは不安を助長する。どちらなのだろうか？と作者は問いかける。

吉野 辰海

YOSHINO Tatsumi

SCREW 唐辛子犬

F.R.P.、木、鉄、油性塗料
340 × 115 × 124cm
2011年

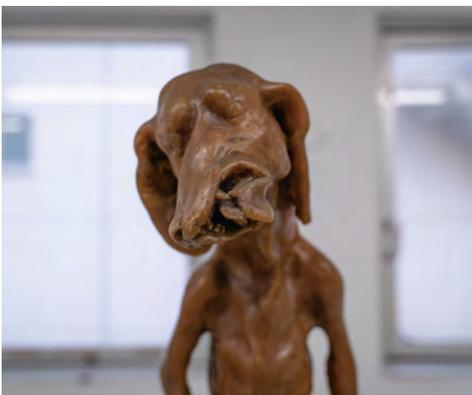
鼻ねじれ

F.R.P.、ワックス、バケツ他
74 × 35 × 34cm
1986年

[NTT 府内ビル別館 府内町3-4-34]



《鼻ねじれ》



《鼻ねじれ》



《SCREW 唐辛子犬》

Wall Art

ウォールアート

招待アーティストに加えて、公募で選ばれた県内にゆかりのあるアーティストが、まちなかにある建物の壁面や商店街のシャッターに壁画を制作し、まちの拠点をつなぐ思いがけないアートとの出会いを演出した。

公募作品 シャッターアート

ウォールアートのひとつとして、シャッターアート作品を募集。

全部で10作品の応募があり、その中から大分市の魅力を発信できるようなフォトジェニックな作品が1点選ばれた。



こっちゃん

Kotchan

にじいろの水族館

アクリル樹脂塗料
230 × 300cm
2022年

[大一ビルシャッター 中央町 1-3-12 中央町商店街内]

今回、シャッターアートは1名のみの公募となった。10点の応募があり、審査の結果、こっちゃんの《にじいろの水族館》に決定した。「商店街の中に水族館があったら、何げない日常が少し特別なものになるかもしれない」という作者の意図からもわかるように、見た人が嬉しくなるような作品である。大一ビルの小ぶりなシャッターに可愛らしく泳ぐ海の生き物たちのさわやかでカラフルな姿にシンパシーを感じるであろう。



埜雅夫のウォールアート作品《見護る牡丹》は、竹町の西側、TAKENISHI TERRACEの隣のキムラヤビルの壁面に描かれた。あまり目立たない場所だが、むしろ隠れ家的な空間で、「巨大な牡丹」を発見した時の意外性や驚きを埜は重視した。しかし、なぜ「牡丹の花」をそれも一輪だけ大きく描いたのだろうか。そこには人知れず咲きほこり、命をつなぎ、散っていく花の姿に、「自然による美しさの究極の発露」を見たからである。都市というコンクリート・ジャングルのビルの外壁から、空に溶け込むように、人々を見護る巨大な「花」こそ、人々の心を照らしてくれる太陽のような存在なのである。実際に壁画が完成して、高さ15mの足場と防護ネットが外され全貌が露^{あらわ}になった時、それは驚嘆を超え感動に変わった。その巨大さ、細部まで描き込まれた再現性の高さ、牡丹の花の優美さなど、我々がこれまで味わったことのない光景であり、人々の心のランドマークとなったのである。

埜 雅夫

HANAWA Masao

見護る牡丹

水性シリコン系ラジカル塗料

1430 × 1830cm

2022年

[キムラヤビル西側壁面 中央町 3-6-10]



Art Marche

アートマルシェ

中心市街地の飲食店を会場として「アート」×「食」×「空間」によるコラボ企画を実施し、店舗とアートの出会いによりまちの新たな魅力を創出した。

[Modern Chinese Restaurant OPERA]

岩澤 有徑 (現代美術家)

[イシカワ珈琲]

前田 哲明 (彫刻家)

[TOMO Clover (トモクローバー)]

前田 亮二 (染色作家)

[ビストロ 俊]

森 貴也 (彫刻家)

[AN/ON BURGER (旧:SHIRO BURGER)]

山本 豊子 (美術家)

[10 COFFEE BREWERS]

[婆皿よしたけ]

Oelectronica (美術ユニット)

[月の木]

[遊膳割烹 なか邑]

サバコ (彫刻家)



デジタルスタンプラリー

会期中は、スタンプラリーを実施。携帯のカメラで専用の二次元コードを読み取り、アートマルシェ参加店舗(4つ以上)に加え、NTTアートシアターのスタンプを集めた方には、抽選で食にまつわる大分県産品の賞品がプレゼントされた。



《No.060102-B》



《No.180302-B》



《Cherry blossom No.201022-E》



《No.050912-B》

店舗名

Modern Chinese Restaurant OPERA

〔都町2-1-7 アートホテル大分1F〕



エントランス



会期限定メニュー

岩澤 有徑

IWASAWA Arimichi

〔No.060102-B〕〔No.180302-B〕

〔Cherry blossom No.201022-A~G〕〔No.050912-A,B〕

アートホテルは岩澤有徑が大分でよく宿泊するホテルで、今回の展示も本人からの申し出であった。大分の歓楽街、都町を背後に、国道197号線（昭南通り）に面したロケーションは、今回のアートマルシェにおいても意義深いサテライトとなった。ここで岩澤はホテルのロビーとフロント傍に大型の絵画を設置。オレンジとブルーグリーンの抽象絵画はきらびやかなホテルの導入空間に負けない存在感を示していた。また、隣接する Modern Chinese Restaurant OPERA には、金色の額縁入りのいかにも万人受けしそうな桜の花を描いた具象絵画を店内に5点と道路側に2点展示。レジ付近にはLEDを仕込んだ未来的な作品を設置した。映像と平面、抽象と具象など対面する制作を続けている岩澤にとって、ホテルやレストランといった日常の場への潜入は、環境にインボルブする視知覚の装置によって、人々の常識や固定観念に小さな亀裂を入れ、そこから美術への関心や意識の転換を図る契機と考えているのであろう。

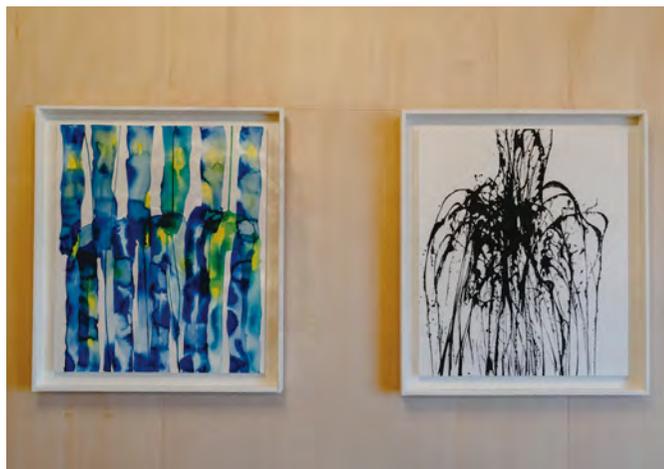
店舗名

イシカワ珈琲

[府内町 2-2-22 2F]



会期限定メニュー



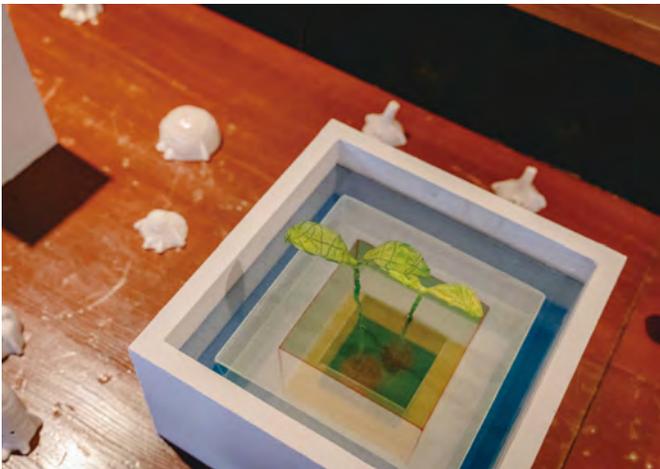
前田 哲明

MAEDA Noriaki

Recent Drawings 2022

前田哲明はイシカワ珈琲に水彩紙にアクリルインクによるドローイング作品を展示した。三角屋根の高い天井とウッディな壁面を持つこの空間は 2022年2月にオープンした府内町の自家焙煎コーヒー専門店である。ドローイングは作者の造形のエッセンスがそのまま表れる。前田にとってのドローイングがどのようなものであるかは、彼のメッセージに端的に表されている。「・・・その時々自分を反映する鏡のようなものであり、立体造形とは全く別次元のメディアとして捉えている。その上、殆どが意図しないで描くため、どのようなカタチが生まれるかが全く予想できない。しかし、このドローイングを描くことが私にとって立体作品を制作する上で欠かせない行為であることも事実である。・・・」。実際前田のドローイングは、鉄の重々しさや材質感から解放され、速度のある線や瑞々しい透明感を湛えた画面からは、作者の息づかいやほとぼるる気韻生動がそのまま伝わってくるのである。





店舗名

TOMO Clover (トモクローバー)

[府内町 1-4-22 おかべ 12ビル102]



前田 亮二

MAEDA Ryoji

ヒト・シゼン

「あなたの“しあわせ”をつくり人生がより良い流れに変わるキッカケとなる幸運のフレンチレストラン」。これが TOMO Clover のコンセプトである。コロナ禍以降、夜間のみ少数組の完全予約制での営業に切り替えた。なかなか予約が取れない店としても知られる。もともと、当日客や少人数で使用するカウンター席は現在使用されていない。前田亮二は店の空気感を大切にしながら、そのカウンターにやわらかい色彩の箱型のミニチュールを展示した。箱の内部は、いずれも前田が得意とするシルクオーガンジーを染めたレイヤーによる小宇宙が展開されており、のぞきこんだり、近づいたりしながら楽しむことができる。その周りにはにぎやかな野菜のオブジェ達を数多くあしらった。これら小さなかわいい作品群は美味しいフレンチを楽しむ空間の中で、一つの彩りとなっていた。

店舗名

ビストロ 俊

府内町 2-4-15 若竹ビル 2F
ふないアクアパーク側

会期限定メニュー

森 貴也

MORI Takaya

THE FORCE

ビストロ 俊は自然派ワイン&クラフトビールとこだわりの一品料理をアラカルトで楽しむ店で、スタイリッシュな若者が集う。2018年の回遊劇場では、空き店舗だったこの空間を、拠点として使わせてもらった。その後スケルトンを活かしたコンクリートむき出しの天井、壁面、床に店主が仲間とDIYで拵こしらえたカウンターやJAZZライブのステージにもなる小上がりなど、個性的でエネルギッシュな店舗に生まれ変わった。森貴也はここで日常ではありえない形状の作品《THE FORCE》を展示。強力な圧力をかけて強制的に変形させた角材は、小さいもので4t~25t、大きいものは100t以上の力が加わっている。人智を超えた圧倒的な力の痕跡、素材の臨界点、裂け目から発するエネルギーは、ブルータリズム的なインテリアに負けない強さを持っている。一方トイレ内は、柵に並んだ小ぶりでかわいらしい同タイプの作品や照明器具に転用したものなどトイレの空間に見事に溶け込んでいた。





撮影 / 未正真礼生

店舗名

AN/ON BURGER (旧: SHIRO BURGER)

府内町 2-4-15 若竹ビル 104



山本 豊子

YAMAMOTO Toyoko

宇宙時代の独身主義、さえも

AN/ON BURGERは地元の食材を中心に、オールハンドメイドで提供するハンバーガー店。山本豊子は黒を基調としたスタイリッシュな広い室内空間を持つその壁面にやや大ぶりの版画作品を展示した。白とライトグレーの背景の中央にはコバルトブルーの人影のような形象が浮かぶ。黒との対比によって壁は息づき、別世界の入り口のような感覚に襲われる。このブルーという色彩は宇宙から見た異星人が地球の青に染まったことを意味しており、宇宙時代の独身主義者がコレクションした異星人の肖像である。版表現やオブジェ、映像作品などで独自の世界を構築する山本豊子は、トイレにも、コレクターのモニタージュ写真と宇宙に関連したニューメキシコ、ピスティの風景の映像などを展示し、トイレナーレへのオマージュを送ってくれた。

店舗名

10 COFFEE BREWERS

中央町3-6-13 ロキシービル2F



Olectronica

Drawing - overlap

10 COFFEE BREWERSは竹町の西出口に近いロキシービルの2階で営業するカフェ&バー。当初、アートマルシェはレストランに限定していたため、候補に入ってなかったが、このカフェの窓からは埴雅夫の壁画《見護る牡丹》を間近で見ることができる絶好のスポットである点やOlectronicaの作品をすでに所有（展示）し、ハイテックでスタイリッシュなインテリアが若者に人気である点などで、会場に加えさせてもらった。今回、オレクの新作のドローイング作品《Drawing-overlap》を展示。額縁入りのドローイング作品は、幾重にもレイヤーを重ね、その平面の中に彼らの主要なモチーフである「人」を配置した作品で、紙の中に空間や建築の創造が試みられていた。一方、大型パネルの作品は平面性を意識しつつ、紙や着彩、線などをより直感的に重ね、重なるの上下や方向が曖昧となる事を狙った。背景や環境としての機能を持つ大型平面作品は、その前にある空間やレイヤーを取り込むことで限定的な空間を作り出す。



埴雅夫作品を窓から望む《pewter figure》



《stonescape》



《wood figure 群》



《glass case scene 2022》



《glass case scene 2022》

店舗名

婆皿よしたけ

中央町 3-5-16 wazawazaビル 1F



会期限定メニュー

Olectronica

「stonescape」

「wood figure 群」

「glass case scene 2022」

創作和食料理の店、婆皿よしたけは wazawazaビルを通り抜ける途中に位置している。鉄筋コンクリートの店内は、コンクリートの床と壁面と木製の什器などが特徴である。4席のテーブルと小上がりの個室が2部屋あり、通路に面した大きなガラスの窓越しにインテリアが通観できる構造である。Olectronicaは建築空間の特性を捉え、石や木など自然物を取り入れた彫刻作品を中心に展示した。その小さな彫刻やオブジェは特製のガラスボックスや展示台に納まった愛おしい世界を構成していた。店内に作品を散りばめ、料理を待つ間、や食事をしながら、ゆっくりと作品を観てもらうことを意図した。そのことによって、空間や料理と呼応して、普段とは少し違う風景が浮かび上がることを期待したのだ。

店舗名

月の木

[中央町 3-5-16 wazawazaビル1F]



サバコ

Savako

「オーバーヘッド・ストーリー “記憶”」 「A-LINK-O」

サバコは今回オーバーヘッド・ストーリーというシリーズで、NTTアートシアターと各店舗とをつないだ。一つ目のオーバーヘッド・ストーリーは“記憶”。会場はwazawazaビル1階のモール沿いにある高級鮨店。地産地消にこだわり、大分県産の食材を使用した新鮮な魚、海産物の食感や香りが楽しめるお店だ。長いカウンター席と椅子席のある落ち着いた雰囲気の空間で鮨や海鮮料理を堪能することができる。完成された店の設えに作品が入りこむ余地はあまりないが、ここでも店の雰囲気を損なうことなく、サバコワールドを展開する。雲の作品をカウンター後部の梁から吊り下げるとともに、ポルチコポピリンなど小さなオブジェを窓際の棚にさりげなく置くことで、より自然に店内と融合した。また玄関入口横の屋号を揮毫した看板のあるショーウィンドウには、アイキャッチ的アイコンの役割を担った、樹脂、ウレタン塗料で仕上げたカラフルでポップな宇宙人を登場させ、人目を引いた。



《オーバーヘッド・ストーリー “記憶”》



《オーバーヘッド・ストーリー “記憶”》



《A-LINK-O》



店舗名

遊膳割烹 なか邑

[中央町3-1-11 姫野ビル102]



サバコ

Savako

オーバーヘッド・ストーリー “気配”

二つ目は遊膳割烹 なか邑。和食をベースにしながら、独自の創作料理を提供する店。黒い横板で覆われた小ぶりでシックな外観を持つ店舗のドアを開けると、L字のカウンター席とテーブル席一つだけの落ち着いた雰囲気。シェフの世界観が料理、器、インテリアなどに反映した小宇宙である。ここでサバコは、店内のテーブル席の縁を沿うように天井まで伸びた木に、綿で作ったさまざまな形のクラウドをぶら下げた。「偶然見上げたタイミングとその時の気持ちが入ると、それだけで嬉しくなったりもします」とサバコは言う。確かに我々は空を見て、雲の形に想像力を膨らませる。店内の限られた空間で、独自の感性と造形感覚で世界の網目に濃密な物語を紡ぎだす。



シンポジウム

Symposium

アートと食をめぐる旅

日時：10月29日(土) 13:30～15:30

場所：NTTアートシアター

県外で活躍する方や県外から大分へ移り活動する参加アーティストの方々に、日本のみならず海外での作品制作・展示および食にまつわるエピソードに加え、「回遊劇場 AFTER」に期待することなどを語ってもらった。

参加者：穴井 佑樹（メディアアーティスト）・岩澤 有徑（現代美術家）・塙 雅夫（画家・壁画家）・前田 哲明（彫刻家）
宮川 園（たべもの建築家）・山本 豊子（美術家）

進行：菅 章ディレクター



回遊劇場と大分のアートシーン

日時：11月26日(土) 14:00～16:00

場所：NTTアートシアター

「回遊劇場 AFTER」参加アーティストの中から、主に県内を拠点に活動する方々をお呼びし、本フェスティバルにおける展示作品の制作秘話やこれからの大分のアートについて語ってもらった。

参加者：青トンカチ（インスタレーション作家）・Olectronica（美術ユニット）・サバコ（彫刻家）・前田 亮二（染色作家）・森 貴也（彫刻家）

進行：菅 章ディレクター



アーティストによるシンポジウム、トークイベント、ワークショップのほか、パフォーマンスなど市民が自ら参加し、楽しみながら文化芸術に触れられるイベントを開催した。

アーティストトーク

Artist Talk



大分の記憶と記録

日時：10月30日(日) 10:30～12:00

場所：NTTアートシアター2階 ワークショップルーム

本フェスティバル参加アーティストである甲斐扶佐義が、カメラを通して記録した大分を、二宮圭一を交えて、記憶をたどりながら、当時のエピソードトークを展開した。

登壇者：甲斐 扶佐義(写真家) × 二宮 圭一(画家・ディレクター) × 菅 章ディレクター



ネオ・ダダ 食とアートの原点

日時：11月19日(土) 13:30～15:00

場所：アートプラザ2階 アートホール(荷場町3-31)

本フェスティバル参加アーティストであり、伝説のアヴァンギャルドグループ、ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズの残り少ない戦士でもある、吉野辰海と菅ディレクターとの対談を実施した。

登壇者：吉野 辰海(造形作家) × 菅 章ディレクター

マルシェイベント

Marche Event



アートマーケット(アートプラザ連携事業)

日時：10月30日(日) 10:00～15:00

場所：NTTアートシアター

アートプラザで大人気のアートマーケットが本フェスティバルに登場。大分県内のアーティスト・ものづくり作家の作品の展示や販売を行った。



ふないZAC祭 全食力 ～ZAC新たな時代へ～ (田北調理師専門学校連携事業)

日時：11月3日(木・祝) 11:00～15:00

場所：田北調理師専門学校(府内町2-5-7)

ふないアクアパーク(府内町2-3)

NTTアートシアター

田北調理師専門学校の学生が、学校を飛び出し、NTTアートシアターにて、クロード・モネにまつわる料理展示を行った。

アートツアー

Art Tour



ディレクターズツアー

日時：10月30日(日) 13:30～
11月12日(土) 13:30～
11月23日(水・祝) 10:00～

「回遊劇場 AFTER」のディレクター大分市美術館の菅館長がまちなかに点在する本フェスティバルの作品や面白い路地を巡るなど、ディレクターならではの案内が行われた。

ポールさんとまち歩きツアー

日時：11月3日(木・祝) 14:00～
11月13日(日) 14:00～

「おおいたトイレナーレ2015」や2度の「回遊劇場」で大活躍したボランティアガイドの“ポールさん”と一緒に作品を巡り、まちの魅力を再発見するツアーが行われた。

大分路上観察学会ふれぜんつ
トマソン探偵団「回遊劇場」編

日時：11月6日(日) 13:00～

大分にゆかりの芸術家・赤瀬川原平の「路上観察学会」「トマソン」に倣い、県内でまちあるき型ワークショップをおこなう『大分路上観察学会』が、路上観察をしながら、本フェスティバルの作品などを案内した。



ワークショップ

Workshop

大分市が進めるアートレジオン推進事業において、佐賀関と野津原の旧校舎アトリエで活動する大分在住のアーティストによるワークショップを実施した。

場所：NTTアートシアター2階 ワークショップルーム



アートラベル

疋田 武士 HIKIDA Takeshi

日時：11月5日(土) 10:30～12:00

対象：中学生以上

参加者に、アートとは何か思考や創造を膨らませる体験をしてもらうため、透明のボトルに絵の具を流し込み、容器に合わせたオリジナルのラベルを制作した。



『身近なワイヤーアート』

～秋の葉っぱを表現してみよう～

沖 美紀 OKI Miki

日時：11月5日(土)13:30～15:00

対象：高校生以上

一本の線から生まれるワイヤーアート。参加者は、ラジオペンチで紅葉や虫食い葉っぱを形どり、指先を使ってワイヤーに表情をつけながら作品を制作した。

クリエイティブリユース
「ON THE CANVAS」

遠藤 ももこ ENDO Momoko

日時：11月20日(日) 10:30～12:00

対象：高校生以上

参加者は、思い思いの色を塗ったキャンバスに、使われなくなったビーズやフェイクパール・ボタンなどをコラージュし、お部屋に飾れるサスティナブルな作品を制作した。



フレー! ふれー! フラッグ!

Kana

日時：11月20日(日) 13:30～15:00

対象：小学生以上

参加者は、多種多様なカラフルな布に、自由にペイントやコラージュを施し、お持ち帰り用の他に、JR 大分駅に飾る大きなフラッグを全員で制作した。

パフォーマンス

Performance

大分圏清掃整理促進運動会
トイレ清掃パフォーマンス

日時：11月10日(木) 17:00～17:40

場所：NTTアートシアタートイレ

赤瀬川原平らが結成した前衛芸術グループ、ハイレッド・センターの首都圏清掃整理促進運動に倣い、「おおいたトイレナーレ2015」より活動をスタートした大分圏清掃整理促進運動会が、いいトイレの日に合わせ、トレードマークである白衣を着て、NTTアートシアターのトイレを清掃した。

また、連携協力でNTTアートシアターの2階の一部屋に、大分圏清掃整理促進運動会の活動の意義や沿革、これまでの活動記録などを展示し、理解を深めてもらった。



出没☆イルミネーター

日下 淳一 KUSAKA Junichi

日時：11月26日(土) 17:00～20:00

全身光り輝く衣装のアーティストである日下淳一がNTTアートシアターや大分市中心市街地に出没。NTTアートシアター内の作品だけでなく、まちなかのパブリックアートやアートマルシェ参加店舗における展示作品なども巡り、大分の夜のまちを明るく怪しく?照らした。



会場運営

Venue management



回遊劇場 AFTER インフォメーションセンター 「NTT アートシアター」

場所：NTT府内ビル別館 府内町3-4-34

メイン会場であるNTT府内ビル別館を会期中は、「NTTアートシアター」と呼び、作品展示やイベントのほか、インフォメーションとして情報発信を行った。

また、会期中は、音楽イベントなどのステージイベントや Art Table いろいろなどの連携協力により、パンやカレーなどの飲食物の販売も行われ、「アート」と「食」と「空間」が一体となって来場者をもてなした。



ボランティアガイド 「ポールさん」

「おおいたトイレンナーレ2015」や2度の「回遊劇場」で活動したボランティアガイドの「ポールさん」が今回もお客様の案内役などとして大活躍した。



トマリ アサミ

TOMARI Asami

WE ARE HERE, BABY.

アクリル塗料
270 × 580cm
2021年

[福田ビルシャッター(中央町2-7-21)]

トマリアサミは以前、カバン屋だった店のシャッターにさまざまな人種の女性の群像を描いた。この店舗が、お洒落をした人々が集まり、賑やかに過ごしていたと聞き、自分の好きなスタイルを楽しむ人々が堂々と歩ける場所になればと思いながら制作したという。コロナ禍によって、人が集まり騒ぐことができない状況の中、「自信を持って好きなことを好きだと言っていこう」というメッセージを発しながら、大分の若い世代や、この絵の前を通る人々にとって、お守りのような絵になればという思いで描いた。この場所に住んでいる人々が、世代を問わず一丸となれるように、大分を象徴するモチーフをちりばめた。

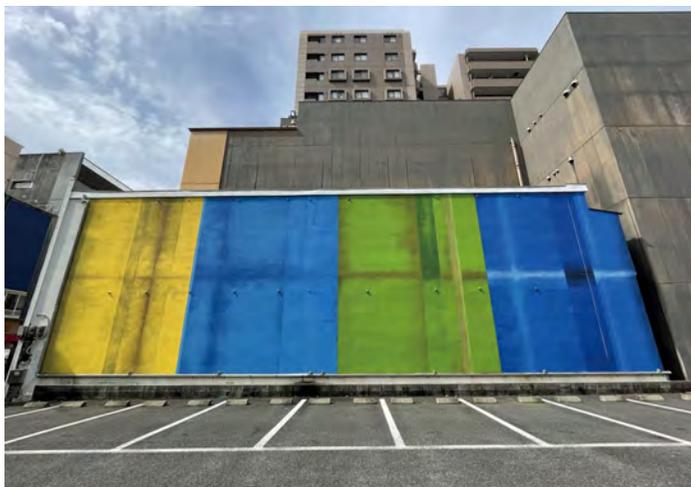
前田 信明

MAEDA Nobuaki

2021 OITA PROJECT -VERTICAL AND HORIZONTAL

アクリル樹脂塗料、アクリル絵の具
700 × 2200cm
2021年

[(旧)府内わっぱ食堂東側壁面(府内町3-2-25)]



前田信明は大分市府内五番街商店街に面したビルの駐車場側(東側)の壁面に7m×22mの巨大壁画を制作。イエロー、セルリアンブルー、ライトグリーン、コバルトブルーの4色は国旗のような象徴性を感じる。そこに私たちの存在を表す、重力の垂直性と大地を意味し、世界が続いていく感覚を導く水平性を意識させた垂直と水平のガイドラインを引き、淡く溶かされた絵の具を画面に置きながら刷毛でコントロールしていく。絶対的な空間が立ち現れるまで、その行為は何十回となく繰り返され、時間と共に画面は熟成されていく。壁面という支持体自体が色彩と一体化したオブジェクトとして現前する。それは、今、ここから開かれた未来世界へ向かう大分スピリッツのメッセージである。

これまでに制作されたまちなかのパブリックな空間を彩る

ウォールアートをはじめとするアートの数々。

「回遊劇場」の舞台となるさまざまな場所に点在するアートを巡ることによって都市の面白さや魅力を体感できるしかけづくりをした。



藤沢 さだみ

FUJISAWA Sadami

溶けていくバターの上で

アクリル樹脂塗料
260 × 210 cm
2022年

[(株)忠文堂シャッター(中央町2-6-33)]

藤沢さだみはセントポルタ中央町のショッピングモールのシャッターに巨大なパンケーキとそこで戯れている二羽のペンギンを描いた。溶けていくバターに乗ったペンギンと下から何か話しかけているようなもう一羽のペンギンは、まるで会話をしているように、楽し気である。動物は人間のように笑ったり泣いたりといった表情はないが、その特徴的な動きや見た目にとってもユニークな表情を感じるという藤沢。そこに自分なりのエッセンスを加えることで、動物が本来持っている可愛らしさやユニークさをいっそう強調し、見る人がグスツとなるような想像を呼び込む世界観を描き出そうとした。

snipe1

aALGORITHM

スプレー塗料(エアロゾル)
750 × 1450 cm
2022年

[若竹ビル西側壁面(府内町2-4-8)]



日本人グラフィティライターの先駆者 snipe1の巨大壁画が若竹ビルに完成した時、境界の雰囲気が大きく変化し、若者の注目を浴びた。この同じビルの横にはブーゲンビリアが大輪の花を咲かせ、通りにスタイリッシュな店舗が立ち並ぶ大分のサブカルチャーの発信地でもある。snipe1は、ブーゲンビリアの花や葉の色彩と響き合うローズ系やグリーンを主調色としたスプレーワークを駆使して熱気あふれるグラフィティを展開。作品のテーマはアルゴリズム。「『計算可能なもの』を計算する手続き」によって人々の嗜好や考えまでもコントロールするAIコンピューターやSNSのヴァーチャルな世界への警告をし、自らのリアルな感覚の重要性を訴える。こうした作者のメディアとメッセージがまちを刺激し話題のスポットとして新たな文化を創っていくのだろう。



青トンカチ Aotonkachi

インスタレーション作家。山本理一郎(1994年兵庫県生まれ)とウメダタカヤ(1998年福岡県生まれ)を中心とした建築環境コレクティブ。2020年に大分で行われた建築展覧会の設営をきっかけに活動を開始。翌年には由布市の山の中で約50人の学生と共にコロナ禍のアジール空間となる「ツリーハウス」を制作。その後、建築を背景に活動を展開し、複数のイベントに参加&企画する。2021年秋、別府の空きビルを利用し、人と空間をインタラクティブに繋ぐ作品「道しるべ」を空間実験アキバのあきばにて制作。2022年春、クラウドファンディングで資金調達を成功させ、原点である「ツリーハウス」の隣にサウナを増設。日本初となる「ツリーハウスサウナ」を完成させた。現在は作品制作の傍ら、隔週で「ツリーハウスサウナ」を開放している。



穴井 佑樹 ANAI Yuki

メディアアーティスト。1987年大分県生まれ。慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科修了。大学在籍時よりチームラボにてデジタルアートチームを立ち上げ、BUMP OF CHICKEN等、著名アーティストのライブ演出を多数手がける。独立後は、「自然はメディアである」をコンセプトに、自然の持つ多様な側面や、自然から発せられるメッセージを、光や音などの様々なメディアを用いて表現を行う。代表作の「in the rain」はメディアアートの世界的な祭典「Ars Electronica」に招聘され、昨年発表した「Re-filter」はギリシャのアテネで毎年開催される「Athens Digital Art Festival」で展示されるなど、国内外問わず活動を行う。



岩澤 有徑 IWASAWA Arimichi

現代美術家。1958年京都府生まれ。1981年桑沢デザイン研究所グラフィックデザイン研究科卒。1989年Bゼミスクール修了。東京、名古屋、大阪で個展を開催する中、2001年から3人ユニットUNEASINESSを結成し、大阪、神戸、ハンガリー、韓国で展開する。近年の主な個展では、2012年奈義町現代美術館ギャラリー、2015年Helel_121(バーゼル/スイス)2013、2018年Gyodong Art Museum(韓国)など。主なグループ展に2018年「現代アートの宝箱 OPAM 利岡コレクション」大分県立美術館、2018年「UNEASINESS16」奈義町現代美術館ギャラリー、2019年回遊劇場 SPIRAL 他、近年は、全く違うスタイルの作品を同時に発表する特異な視点を持つ人間として映像と平面、抽象と具象など対面する制作を続けている、それは全て写真と美術のあり方をテーマとしている。



岩田 敦之 IWATA Atsuyuki

デザイナー。1978年大分県生まれ。コンピュータグラフィックスの技術を活かし、TVコマーシャルやプロモーションビデオなど、多数の映像制作に関わる。2016年から九州産業大学芸術学部ソーシャルデザイン学科情報デザイン専攻の教員として、モーショングラフィックスなどの映像表現やタイポグラフィを中心としたグラフィックデザインに関する作品制作に取り組みつつ、ビジュアルコミュニケーションデザインの効果的な活用方法についての研究を進めている。特に近年は、地域社会との連携を積極的に進めており、関門海峡花火大会におけるイベントガイドデザインなど、プロジェクトマッピングやデジタルサイネージに関する制作を行っている。



Oelectronica

加藤亮(1984年大分県生まれ)、児玉順平(1984年熊本県生まれ)による美術ユニット。作品制作のみならず、空間デザインや企画のプロデュースなど活動は多岐に渡る。多種多様に変化する時代の隙間を埋めるため、表現の手法にとらわれず模索を続けている。代表作は「wood figure」[風景への参道]「frags01/02」等。2018年には佐賀でのレジデンスプロジェクト「side by side」を展開。地域や路上といったより生活に近い場所での表現を行う。2021年には宮若国際芸術トリエンナーレ招待作家として最新作を展示している。



甲斐 扶佐義 KAI Fusayoshi

写真家。1949年大分市上野生まれ。11歳で写真開始。1968年同志社大学入学、即除籍。1972年京都出町に伝説の喫茶店「ほんやら洞」開店。1977年初写真集「京都出町」出版。1978年米国エバークリーン大学で写真展。以降数年間で約20回鴨川べりで大規模な青空写真展開催。1985年バー「八文字屋」開店。2001年より連続的に欧米各地で招待個展開催。2009年京都美術文化賞受賞、2014年パリ・ボザール展ジャン・ラリヴィエール賞受賞。2015年ほんやら洞全焼でプリントとネガを大量に消失。2019年元離宮二条城二の丸御殿台所にて初回顧展「京都詩情」開催。主な写真集「路地裏の京都」「Beautiful Women in Kyoto」「京都の子どもたち」「ほんやら洞 70年代京都」など、40冊以上出版。



サバコ Savako

彫刻家。1968年千葉県生まれ。明快で楽しいフォルムが話題となり外国のコンペでの入賞をきっかけに2004年ニューヨークでの個展をはじめ、東京、京都、大阪、米国、中国、フランスなど数々のグループ展に参加。第7回大分アジア彫刻展(2004年)にて奨励賞を受賞。2012年には朝倉文夫記念館(大分)にて個展を開催し直径8.3mのアダムスキー型のUFOを発表。その後UFOは大分上野の森口いこいの道、大分市美術館、パークプレイス大分でも展示される。2018年デンマークのビルン彫刻公園にポップでユニークな作品が恒久設置される。2021～22年オーストラリアの国際野外彫刻展に参加、好評を博しキッズチョイス賞を受賞。大分市在住。



埴 雅夫 HANAWA Masao

画家・壁画家。イタリア・ジェノバで教会壁画の制作や修復に携わり、大型テーマパークでは壁画ディレクターを務める傍ら多くのアートワークを描いている。映画・ドラマの美術制作にも多数参加し、映画『清須会議』(2013/三谷幸喜監督)、連続テレビ小説『花子とアン』(2014)などの美術セットや劇中絵画を担当。大河ドラマ『いだてん～東京オリムピック騒～』(2019)では嘉納治五郎などの肖像画を制作。映画『哀愁しんでれら』(2021)の劇中肖像画はポスターにも使用された。東宝スタジオに描いた十数メートル規模の巨大壁画『七人の侍』『ゴジラ』は歴史ある撮影所の顔となっている。近年はオリジナル作品の制作を開始し2022年大分県竹田市で人生初個展を開催。



前田 哲明 MAEDA Noriaki

彫刻家。1961年東京都生まれ。80年代中頃から鉄による人体彫刻の制作をはじめ、その後、有機的なフォルムの彫刻やインスタレーションを経て現在に至る。1997年文化庁在外研修制度を受けイギリスへ渡り、その後、約4年間の滞在中、ヨークシャー・スカラップチャーパークやヴェラン・ファウンデーションなどで個展を開催。帰国後、2001年現代日本彫刻展(大賞)や2007年本郷新賞を受賞。他に、ときわ画廊やギャラリー21yo-jなどで個展、グループ展多数開催。現在、九州産業大学芸術学部特任教授。福岡県在住。



前田 亮二 MAEDA Ryoji

染色作家。1974年愛媛県生まれ。2001年大分県立芸術文化短期大学美術専攻科(染色)修了。新制作展2002年～、2004・2006年新作家賞受賞。染色は色を塗るのではなく「浸透」させます。布そのものに「浸透」した色には何とも言えない優しさを感じます。薄い生地を使用できる点も染色の特徴であると考え、シルクオーガンジーを重ねた奥行きのある作品を展開。1枚1枚の淡い色彩が重なり合うことにより、深く優しい色彩に変化させ立体感のある作品を生み出す。また、その素材感を用いて、空間に対する遊び心を大切に制作中。



宮川 園 MIYAKAWA Sono

たべもの建築家。1987年熊本県生まれ。東京造形大学で建築を学び、大学3年時に別府の浜脇地域のまちづくり計画への参加を機に初めて大分県を訪れる。元遊郭街の研究や寂れた別府と歴史に興味を持ち、まちづくりは住まないと分からないと2010年より関東から別府に移住。「BEPPU PROJECT」に入社「SELECT BEPPU」店長、独立しキッチンスタジオ・ギャラリー「Studio Noqoodo」主宰、「スパイス食堂クーポンズ」店長などを経て、2018年～現在は「バサラハウス」主宰、たべもの建築家として、パーティーのケータリングや商品・メニュー開発など、食を通じて、記憶に残る物事と空間を提供している。



森 貴也 MORI Takaya

彫刻家。1981年熊本県生まれ。大分県竹田市在住。各地で個展、グループ展、ワークショップ、講演会を行っている。第11回大分アジア彫刻展で、大分県出身在住作家初の大賞を受賞。第25回UBEピエンナーレで宇部マテリアルズ賞。第72回行動展で行動美術賞（最高賞）。形が出来上がって完成ではなく、時間とともに変化し、成長していく『生きている彫刻』をコンセプトに作品制作している。主な作品のシリーズは『境界』『繋ぐ』『THE FORCE』近年は城原地区の古民家を改修してギャラリーとカフェを作るなど、まちづくりにも携わる。



山本 豊子 YAMAMOTO Toyoko

美術家。1968年大分県生まれ。青山学院大学理工学部物理学科卒業。2000年「VOCA展」、2004年「資生堂 ADSP」入選。東京を拠点に、福岡、大分などで発表。架空の物語を元に立体、ビデオ、版画、ドローイングを制作。2001年より大分県別府市の精神科病院で、患者、その家族、医療関係者にアート作品を通した「こころの変化」の場を提供するパブリックアートも手掛けている。



吉野 辰海 YOSHINO Tatsumi

造形作家。1940年宮城県生まれ。1960年「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」に参加。発表を開始する。1960年グループ展「第2回ネオ・ダダ展」、1964年個展「MONO-KUI SHOW」(内科画廊・東京)、1969年「第9回現代日本美術展」、1971年「第10回現代日本美術展」(東京都美術館)、1990年「水犬・吉野辰海展」(P3 ALTERNATIVE MUSEUM・東京)、2002年「熊本国際美術展 ATTITUDE 2002」(熊本現代美術館)、2007年「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」(森美術館・東京)、2012年「吉野辰海・犬の行方展」(埼玉県立近代美術館)、その他、個展・グループ展多数。1980年代より生物の代表形として、犬の表装を持つ作品を数多く作り続ける。

シャッターアート公募作家



こっちゃん Kotchan

イラストレーター。1993年大分県生まれ。本名は小島ひとみ。2021年よりイラストレーターとして別府、大分を拠点に活動中。初の個展『にじいろ』から“にじいろこっちゃん”と呼ばれるようになる。虹を感じさせる作品が特徴。コンセプトは“にじいろの魔法”見た人が少し元気になるような優しくあたたかい作品作りを目指している。

広報活動

SNS	回遊劇場 AFTER 公式	Facebook	フォロワー数：588	いいね件数：1,557件
		Instagram	フォロワー数：401	いいね件数：3,119件
		Twitter	フォロワー数：48	いいね件数：178件
(2022年12月31日現在)				

印刷物	ポスター／B2	1,000枚
	チラシ／A3 二つ折り	20,000枚
	ガイドブック／A5判 32ページ	20,000部

グッズ	クリアファイル
	ピンバッジ
	ラベルシール
	サコッシュ
	箸袋
	コースター
	卓上のぼり
	Tシャツ



会場案内表示	NTTアートシアター会場
	案内サインのぼり



広告	デジタルサイネージ	10/1～11/30	「回遊劇場 AFTER」開催のお知らせ
	柱ポスターフレーム(ガレリア竹町通商店街内)	10/24～11/30	
	市報おおいた	9.1号	大分アートフェスティバル2022「回遊劇場 AFTER」
	10.1号	アートでまちの魅力を再発見	
	11.1号	アート×食×まち歩き 大分アートフェスティバル2022	



新聞

大分合同新聞	10/29	「まち」を美術館に 大分市中心部で回遊劇場始まる
	11/04	県内3ヵ所、異なるテーマで 大分出身、甲斐扶佐義の写真展
	11/27	街中にたたずむ名建築 NTT 府内ビル別館 大分市「回遊劇場」きょうまで公開
大分合同新聞 GXジュニア	11/12	吹き出しバトル! オモシロせりふ大募集!!
朝日新聞	10/26	大分 街中にアート 28日から「回遊劇場」
西日本新聞	10/27	「制作と生活」日常への問い 美術ユニット「オレクトロニカ」

テレビ

OBS	11/9	いいやん!大分
TOS	11/9 11/21	ゆ〜わくワイド & News
OAB	11/2 ~ 11/25 11/25	各種番組内 CM じもっと! OITA
J:COM チャンネル大分	11/1 ~ 11/26	大分シティインフォメーション

ラジオ

OBS	10/24 11/2 ~ 11/25 11/20	情熱ライブ! Voice 各種番組内CM(期間中月・水・金) ゴリけんの九州・沖縄ぐるぐるマップ
エフエム大分	11/5 11/12 11/19 11/26	各種番組内 CM

WEB

NTT西日本 News Release	大分アートフェスティバル 2022「回遊劇場 AFTER」への特別協力について~NTT西 日本のアセットを活用して地域活性化イベント をサポート~
大分合同新聞	大分市中心部を美術館に 「回遊劇場 AFTER」11月27日まで
朝日新聞	大分市の中心市街地がアート会場に 28日から「回遊劇場」
iナビおおいた	【アートフェスティバル大分 2022】 「回遊劇場 AFTER」開催
いいやん!大分	アート×食×まち歩き 大分アートフェスティバ ル 2022「回遊劇場 AFTER」

WEB

TOS オンライン	大分市中心部が美術館に 街を巡りながら 楽しむアート「回遊劇場 AFTER」
FNN オンライン	大分市中心部が美術館に 街を巡りながら 楽しむアート「回遊劇場 AFTER」【大分】
OITA Drip.	回遊劇場 AFTER OITA ART FESTIVAL 2022:~11/27(日) /大分市
アートホテル大分	【大分アートフェスティバル 2022】「回遊劇場 AFTER」開催
マチバブ	【9月19日は中止、20日以降は開催予定】 「回遊劇場 AFTER」ペイントワークショップ の参加者を募集します
LOG OITA	10月28日から大分アートフェスティバル 2022「回遊劇場 AFTER」が開催されます

SNS

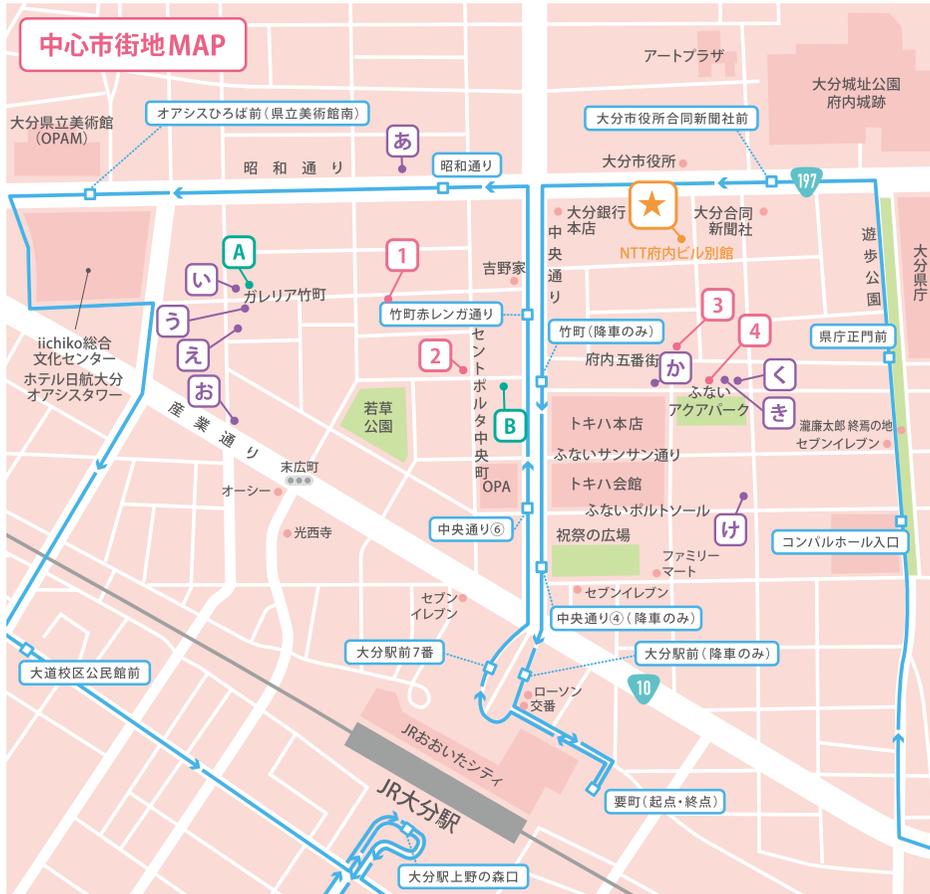
おおいた 中部振興局	11/25 11/26	~休日は大分市中心部でまったりしま せんか?~ キムラヤビル西側壁面「見護る牡丹」
いいやん!大分	10/27 11/1 11/3 11/8 11/9 11/18 11/22 11/25	回遊劇場 AFTER を開催します! 市報おおいた11月1日号 回遊劇場 AFTER 開催中! その1 回遊劇場 AFTER 開催中! その2 きょう放送 テレビ広報「いいやん!大分」 回遊劇場 AFTER 開催中! その3 回遊劇場 AFTER 開催中! その4 回遊劇場 AFTER \イベントのお知らせ/
OITA PRIDE!	9/12 9/22 9/28 11/1 11/4 11/8 11/18 11/22	巨大な牡丹のウォールアートが出現! 中央町の商店街に シャッターアートが出現! 「回遊劇場 AFTER」ペイントワーク ショップを開催しました 市報おおいた 11月1日号の表紙写真 回遊劇場 AFTER 開催中! その1 回遊劇場 AFTER 開催中! その2 回遊劇場 AFTER 開催中! その3 回遊劇場 AFTER 開催中! その4
おおいた 魅力発信局 (oita-citypro)	11/1 11/1 11/30	まち中アート散策(府内町編)♪♪♪ まち中アート散策(中央町編)♪♪♪ 街中に出現した夢色の水族館

雑誌

月刊《シティ情報おおいた》 11月号

フリーペーパー

月刊《生活情報誌モグモグ》 11月号



MAP	場所	作家《作品名》
アートステーション		
★	NTT府内ビル別館 (NTTアートシアター)	青トンカチ・穴井 佑樹・岩澤 有徑・岩田 敦之・Olectronica・甲斐 扶佐義 サバコ・前田 哲明・前田 亮二・宮川 園・森 貴也・山本 豊子・吉野 辰海
ウォールアート		
A	キムラヤビル西側壁面	埴 雅夫
B	大ービルシャッター (中央町商店街内)	こっちゃん
アートマルシェ		
あ	Modern Chinese Restaurant OPERA	岩澤 有徑
い	10 COFFEE BREWERS	Olectronica
う	月の木	サバコ
え	婆皿よしたけ	Olectronica
お	遊膳割烹 なか邑	サバコ
か	インカワ珈琲	前田 哲明
き	AN/ON BURGER (旧:SHIRO BURGER)	山本 豊子
く	ピストロ俊	森 貴也
け	TOMO Clover (トモクローバー)	前田 亮二
パブリックアート		
1	福田ビルシャッター	トマリ アサミ《WE ARE HERE,BABY.》
2	(株)忠文堂シャッター	藤沢 さだみ《溶けていくバターの上で》
3	(旧)府内わっぱ食堂東側壁面	前田 信明《2021 OITA PROJECT-VERTICAL AND HORIZONTAL》
4	若竹ビル西側壁面	snipe1《aALGORITHM》



OITA ART FESTIVAL 2022

会期：2022年10月28日(金)－11月27日(日) 全31日間

会場：大分市中心市街地 各所

鑑賞者数：266,863名

主催：大分市アートを活かしたまちづくり推進会議

名誉会長：佐藤 樹一郎

会長：戸口 勝司

委員：有松 一郎 八坂 千景 吉田 可愛 三好 正昭

監事：穴井 壯志 小林 裕二

特別協力：NTT 西日本 大分支店

連携協力：Art Table いろいろわ アートプラザ 大分圏清掃整理促進運動会
大分大学 理工学部 建築計画研究室 大分路上観察学会
田北調理師専門学校 松田周作建築設計事務所

後援：大分県 大分合同新聞社 朝日新聞大分総局 読売新聞社 毎日新聞社
西日本新聞社 共同通信社大分支局 時事通信社大分支局
日刊工業新聞社 NHK大分放送局 OBS大分放送 TOSテレビ大分
OAB大分朝日放送 エフエム大分 J:COM 大分ケーブルテレコム
月刊・シティ情報おおいた 大分市商店街連合会

ディレクター：菅 章（大分市美術館館長）

事務局：大分市商工労働観光部商工労政課

デザイン：井下 悠（イノシタデザイン）

インストレーター：大久保 剛（カナトリエ）

ボランティアガイド「ポールさん」

上野 静香 大津 奈央 奥村 啓三 河野 圭佑 後藤 沙綾 後藤 裕美
首藤 優弥 園部 道代 田原 みゆき 富澤 史子 藤原 京子

OITA ART FESTIVAL 2022

「回遊劇場 AFTER」記録集

執筆・監修：菅 章（「回遊劇場 AFTER」ディレクター／大分市美術館館長）

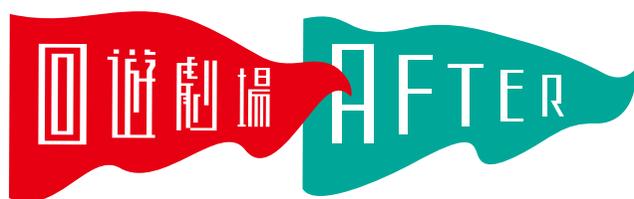
編集：大分市アートを活かしたまちづくり推進会議事務局

デザイン：井下 悠（イノシタデザイン）

写真：合同会社タハラコムデザインオフィス、久保 貴史（ELEMENT）、
大分市アートを活かしたまちづくり推進会議事務局

印刷：株式会社インタープリント

発行：大分市アートを活かしたまちづくり推進会議事務局 © 2023



OITA ART FESTIVAL 2022